

新発田城跡 発掘調査報告書 VIII

(第24地点)

2012

新発田市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、新潟県新発田市大手町6丁目4番16号ほかに所在する、新発田城跡第24地点の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、陸上自衛隊新発田駐屯地内の建物建設に伴って、新発田市教育委員会が調査主体となり、平成21年9月7日から10月6日に実施した。整理作業は、発掘調査終了後の平成21年度、平成23年7月から平成24年3月まで実施し、調査報告書を作成した。
3. 本発掘調査に要した経費は、事業主体である北関東防衛局が全額負担した。
4. 遺物・記録類は、新発田市教育委員会が一括保管している。出土遺物の注記は、「S J 24 区」とし、グリッド・遺構名・層位・日付を続けて付した。
5. 遺構の実測は調査担当者 鶴巻康志、調査員 田中耕作がおこなった。出土遺物は、鶴巻の指示のもと整理作業員が復元・実測した。トレース・レイアウト・表作成は、鶴巻・調査員 一箭義貴を中心として実施し、整理作業員が補助した。写真は木製品の顕微鏡写真を㈱パレオ・ラボ、ほかを鶴巻が撮影した。
6. 木製品の樹種同定は、新発田市の委託を受けた㈱パレオ・ラボがおこない、その報告を掲載した。
7. 本報告書の編集・執筆は、鶴巻が行なった。
8. 調査の記録および出土品は新発田市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書に掲載した遺跡の地図上の位置は、国土地理院発行の1/50,000地形図・1/25,000地形図の「新発田」の中に示されている。本書で用いた方位は磁北を図上に示した。

<遺構>

1. 本書に掲載した平面図は、全体図1/50・部分図1/60・1/25とし、断面図は1/60・1/25とした。
2. 本書に掲載した遺構は検出順に番号を付した。報告書にはピットは検出面ごとに分けて番号を振り直し、他の遺構は、検出当初の番号を踏襲した。搅乱および遺構名を変更したものについては欠番としている。搅乱の範囲は破線で示し、一部はほかの遺構との位置関係を説明するため、本文・図中で欠番の遺構名に（搅乱）を付した。
3. 断面図の位置を示す平面図上のポイントは、各部分図ごとにアルファベット・カタカナで示した。
4. 土色の観察は、『新版標準土色帖』(小山・竹原1967)を用いた。

<遺物>

1. 本書に掲載した遺物実測図・拓影は、大形板材1/8、大形品1/4、小形品1/3を基本とし、図中にスケールを示した。
2. 土器・陶器の拓影は、内面を断面左側（内底面は上）、外面を断面右側に置いた。
3. 遺物番号は本書での通し番号であり、本文・挿図・観察表ともに同一の番号とした。

目 次

I 序 言	3. 第1面検出の遺構	5
1. 遺跡の位置と立地	4. 第2面検出の遺構	13
2. 第24地点の位置と周辺の発掘調査	5. 出土遺物	19
3. 本発掘調査に至る経過	6. 出土木製品の樹種同定	23
4. 調査体制		
5. 本調査と整理作業の経過		
II 発掘調査の概要	III まとめ	
1. 調査区の設定	1. 発掘調査の成果	24
2. 基本層序	引用参考文献	24
	報告書抄録	卷末

挿 図 目 次

第1図 新発田城跡の位置	10	第10図 掘立柱建物1	11
第2図 埋蔵文化財包蔵地の範囲と調査地点	2	第11図 第1面のピット	12
第3図 調査地点の範囲とグリッド設定	4	第12図 第2面全体図	14
第4図 基本層序	5	第13図 第2面の土坑・溝	15
第5図 第1面全体図	6	第14図 掘立柱建物2・柱穴列	16
第6図 第1面の土坑(1)	7	第15図 第2面のピット	17
第7図 第1面の土坑(2)	8	第16図 出土遺物(1)	20
第8図 第1面の土坑(3)	9	第17図 出土遺物(2)	21
第9図 井戸1			

表 目 次

表1 遺構一覧表	18	表3 出土木製品の樹種同定結果一覧	23
表2 遺物観察表	22		

写真図版目次

図版1 新発田城跡第24地点の調査(1)	図版4 新発田城跡第24地点の調査(4)
図版2 新発田城跡第24地点の調査(2)	図版5 出土木製品の光学顕微鏡写真
図版3 新発田城跡第24地点の調査(3)	

I 序 言

1. 遺跡の位置と立地

新潟県新発田市は、県北部下越地方に位置し、人口は約10万人を数える。総面積532.82km²のうち、東寄り約7割が飯豊連峰・櫛形山脈・二王子山・五頭連峰による山間地である。山地の西方に位置する中心市街地付近は、飯豊連峰から流れる加治川によって形成された扇状地の扇端部にあたり、新潟市の東方約20kmに位置する。周囲には水田地帯が広がり、市街地の北側を加治川が西流する（第1図）。

新発田市街地の前身は近世の新発田藩城下町で、当時の城下の範囲は東西1.6km、南北2km程である。新発田城の城郭域は加治川支流の新発田川の旧河道を利用して堀とし、旧河道の形に沿って歪んだ瓢形を呈している。不整五角形の本丸の周囲を二ノ丸が取り囲み、その南東部に三ノ丸が付く梯郭式の曲輪配置となる。本丸と藩の公的施設・重臣屋敷地が集中する二ノ丸、二ノ丸西川門に隣接する御作事所を埋蔵文化財包蔵地としており、これまで24箇所に及ぶ発掘調査を実施している。このうちの第1～4・7～12・16・19・20～22・24地点は、本丸および二ノ丸の北部にあたる新発田駐屯地内の施設建設に伴う調査である（第2図）。

2. 第24地点の位置と周辺の発掘調査

新発田城は、慶長2（1598）年、加賀大型寺から入封した溝口氏により慶長7（1602）年頃から築城された。第24地点の周辺は、二ノ丸西ノ門付近の城外で、築城当初から正徳2（1712）年頃まで家臣屋敷地であったものが、



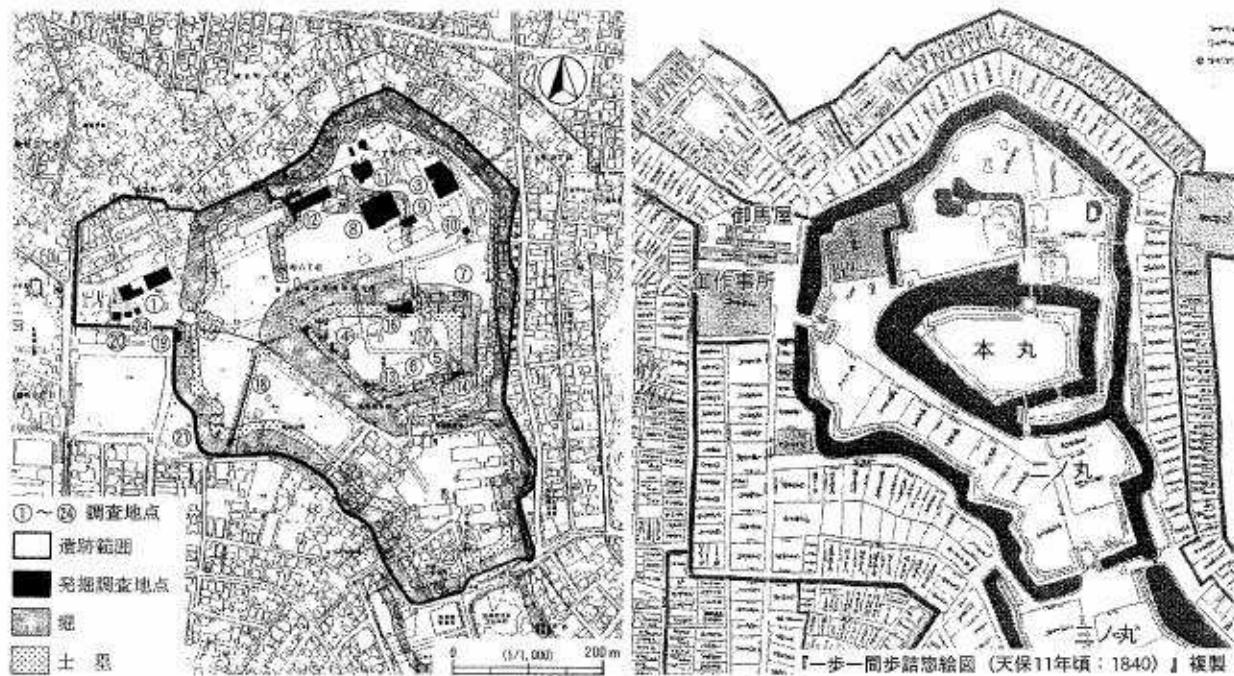
第1図 新発田城跡の位置

寛政 3 (1791) 年頃には御作事所となり、幕末へ至っている（渡邊ほか 2009）。これまで新発田駐屯地内の諸開発に伴い、第 24 地点の北方で第 1 地点（田中 1987），西方で第 20 地点（渡邊ほか 2009），南東で第 19 地点（伊藤ほか 2008）の発掘調査を実施している。御作事所内に相当する第 1 地点で、南北軸、第 20-1 地点では東西軸の建物跡を検出し、これらが御作事所の敷地区画の方向と一致するため、関連する遺構と推定されている。

3. 本発掘調査に至る経過

平成 20 年 11 月に北関東防衛局から新発田市教育委員会（以下、市教委）へ、電源室の建設を計画していると連絡があり、両者で具体的な施工位置や時期、埋蔵文化財の調査対象地に含まれるかの協議を開始した。対象地は前年度に陸上自衛隊新発田駐屯地内で発掘調査を実施した通信局舎（第 20-1 地点）に隣接し、平成 21・22 年度に現地調査と工事を実施する計画であった。同時期におこなっていた白壁兵舎解体移築事業の調整を経て、平成 21 年度中に電源室予定地（第 24 地点）の発掘調査と平成 20 年度に発掘調査を実施したレンジャー訓練塔予定地（第 22 地点）の整理報告書作成作業、平成 22 年度に白壁兵舎移転予定地（第 21 地点）の発掘調査と、第 24 地点の整理報告書作成作業を実施することで合意した。なお、電源室の建設予定地は第 20-1 地点の東に隣接し、他にも周辺で第 1 地点、第 19 地点の発掘調査を実施していたため、事前の確認調査はおこなわずに本発掘調査の積算が可能であった。平成 21 年 5 月 12 日付け閲防第 3238 号で北関東防衛局長より文化財保護法第 94 条 1 項による発掘通知が新潟県教育委員会教育長（以下、県教育長）に提出され、平成 21 年 6 月 9 日付け閲防第 3451 号で北関東防衛局長から新発田市長に発掘調査実施委託の依頼があり、平成 21 年 7 月 15 日付けで北関東防衛局と新発田市が委託契約を締結した。平成 21 年 9 月 4 日付け生字第 1080 号で市教委教育長が文化財保護法第 99 条第 1 項による発掘調査の報告を県教育長に提出し市教委が主体となって本発掘調査を実施した。

発掘調査後、当初計画よりも遺構密度が低かったため調査費用が少なく済み、平成 22 年 3 月 18 日付けで費用減額のための変更契約を締結し、平成 22 年 3 月 19 日まで基礎整理作業を実施した。その後、事業者の計画変更により平成 22 年度の発掘調査・整理作業が平成 23 年度へ延期となった。本格整理作業と報告書作成業務は、平成 23 年度に実施された。



第 2 図 埋蔵文化財包蔵地の範囲と調査地点

成23年6月20日付けで北関東防衛局長と新発田市長が委託契約を締結した後に開始し、平成24年3月14日まで作業を実施した。

4. 調査体制

a. 平成21年度(本発掘調査)

調査主体 新発田市教育委員会（教育長 大滝 昇）	調査担当 鶴巻 康志（生涯学習課埋蔵文化財係長）
監理 土田 雅穂（教育部長）	調査員 田中 耕作（生涯学習課参事）
総括 杉本 茂樹（教育部生涯学習課長）	事務担当 渡邊美穂子（生涯学習課主任）
田中 耕作（生涯学習課参事）	

b. 平成23年度(整理報告書作成)

調査主体 新発田市教育委員会（教育長 塚野純一）	調査担当 鶴巻 康志（生涯学習課 文化行政室 埋蔵文化財係長）
監理 新保 勇三（教育部長）	調査員 一箭 義貴（生涯学習課 文化行政室 臨時職員）
総括 萩野 正彦（教育部生涯学習課長）	事務担当 本田 祐二（生涯学習課 文化行政室 文化財技師）
田中 耕作（生涯学習課 文化行政室長）	

5. 本調査と整理作業の経過

本発掘調査は平成21年9月7日～10月6日までの延べ18日間にわたり実施した。あらかじめ、新発田駐屯地業務隊管理科が建物の計画位置を現地に示し、これに工事掘削分として周囲1m分を加えた80m²を調査区とした。また、グリッドは隣接する第20地点の調査区の軸線を復元し、第19・20地点と共通するグリッドとした。

平成21年9月7日～17日 パックホーを用いて表土、明治時代の整地層を掘削し、第1面の調査を実施した。明治時代以降の搅乱と江戸時代後期の遺構が混在しており、これらを半截し記録を取りつつ掘り進める。また、井戸・大型の土坑は掘削深度が深いため、この面で上半部のみ記録し、下層の地山面まで掘削した後に底面の調査を実施することとした。17日に上層の遺構掘削・記録作業を終え、地山上面まで掘削し下層の遺構を検出した。

9月18日～10月6日 江戸時代後期の遺構が掘り込まれていた層を掘削すると、平安時代～江戸時代前半期の遺物が出土し、地山のシルト層上面で土坑・溝・柱穴などの遺構を検出した。これら、新たに発見された遺構を下層検出の遺構とし、上層で検出したものの、深くなるために掘り残した遺構と合わせ、調査を実施した。井戸の下層付近では湧水が著しく、ポンプで排水しながら調査を進めた。下層で検出した遺構の調査を完了し記録を作成した後、完了写真を撮影する。調査器材を撤収した後、調査区を重機で埋め戻し、現況を復旧した。

10月6日～平成22年3月19日 発掘調査終了後、写真・図面などの現場記録を整理し、平成22年2～3月に出土遺物の洗浄・注記などの基礎整理作業、遺構名の変更・修正作業を実施した。

平成23年7月1日～平成24年3月15日 本格整理作業は、平成23年度7月に遺物実測を開始し、12月から翌平成24年2月にかけて分析委託、写真撮影、挿図作成レイアウト、原稿執筆の作業をおこない、3月に報告書を刊行した。

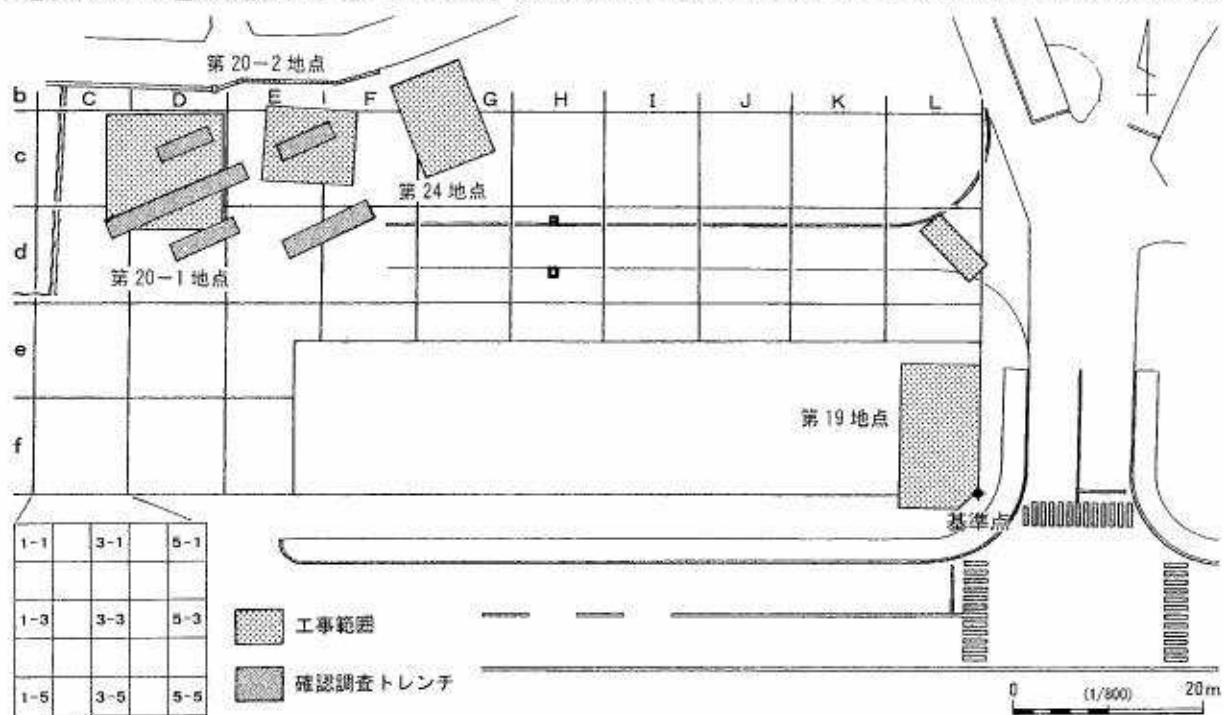
II 発掘調査の概要

1. 調査区の設定

発掘区は平成19年度に実施した第19地点の新設倉庫の南東隅を基準とし、第19地点、第20-1地点、第20-2地点と共に共通するグリッドを掘削範囲に設定した。グリッドはY軸の上方が磁北を示し、一边10mの大グリッドを東西が大文字、南北は小文字のアルファベットで表記した。大グリッドはさらに一边2mの小グリッドに区分し、数字の組み合わせで表記した(第3図)。第24地点はFb・Fc・Gb・Gcグリッドに位置する。調査で用いた標高原点も第19・20地点と共有した。

2. 基本層序

調査区の土層堆積状況は、西に隣接する第20地点の層と類似性が高く、これを参考に区分した。ただし、地点の違いにより層の遺存状況が異なるため、一部の層を統合・細分をしたうえで、土層説明の中に対応関係を示した。基本土層は南北東西の壁面で断面の記録を図示した(第4図)。調査地点の現況は碎石により整地された駐車場で、その下に褐色ローム質粘土の客土が堆積し、これをⅠ層とした。駐車場となる以前、昭和50年代頃まで付近は菖蒲畑として使われており、その後の整地によって撤入されたものである。Ⅱ層は近現代の遺物を含むため明治期から菖蒲畑として使用されていた時期の堆積層とみられる。東壁・北壁寄りの部分で堆積が厚く細分した。Ⅲ層はⅡ層同様に北西側が厚く、南東側が薄い。近世の遺物が出土し、近代の遺物も少量含まれる。西壁ではⅢ'層がブロック状に入る。掘削は重機でⅢ層が露出するまで掘削し、残りのⅢ層を人力で除去した後、Ⅳ層中に掘り込まれている遺構を検出し、第1面とした。断面図で見ても分かるように第1面ではⅢ層から掘り込まれてい

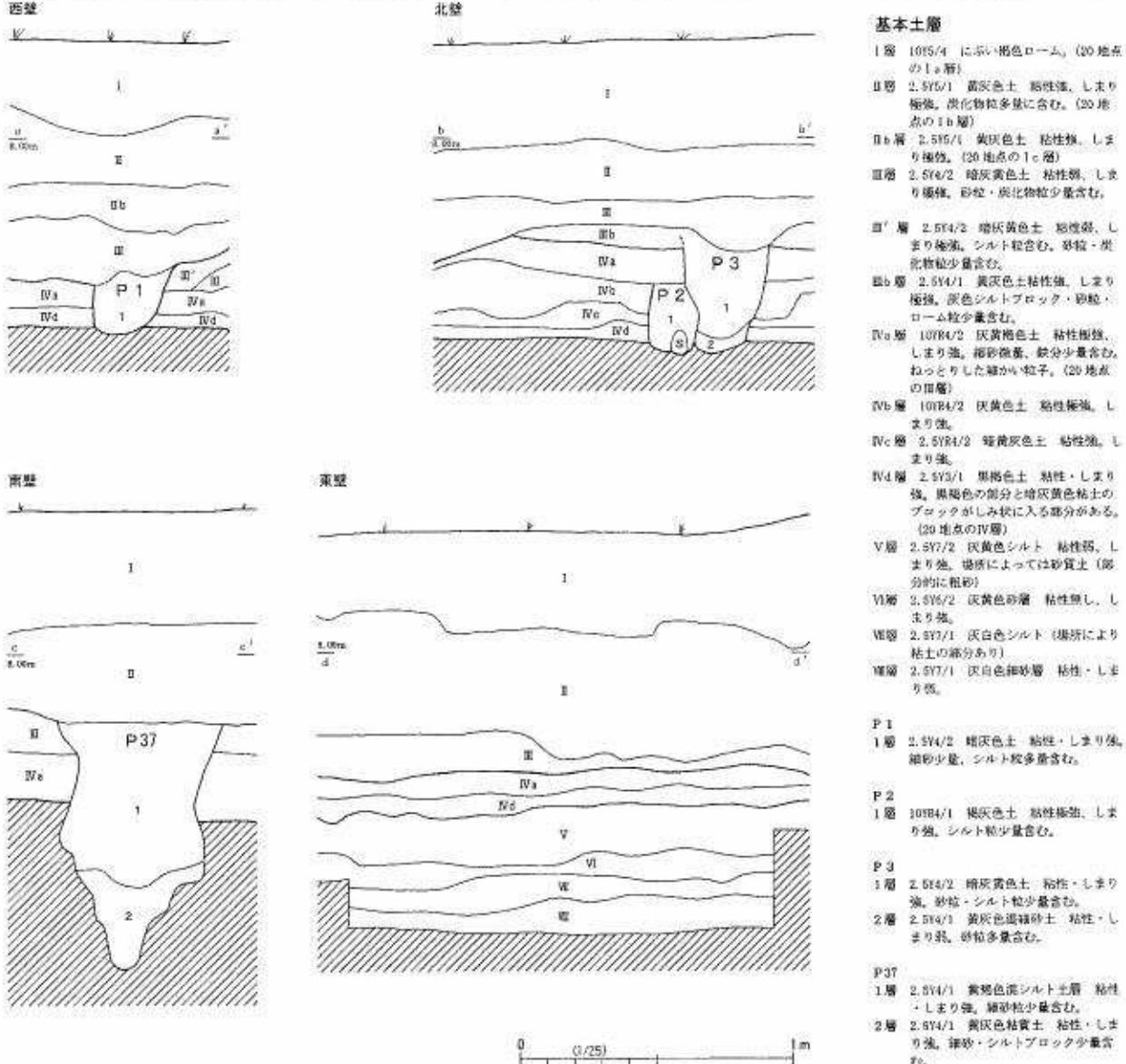


第3図 調査地点の範囲とグリッド設定

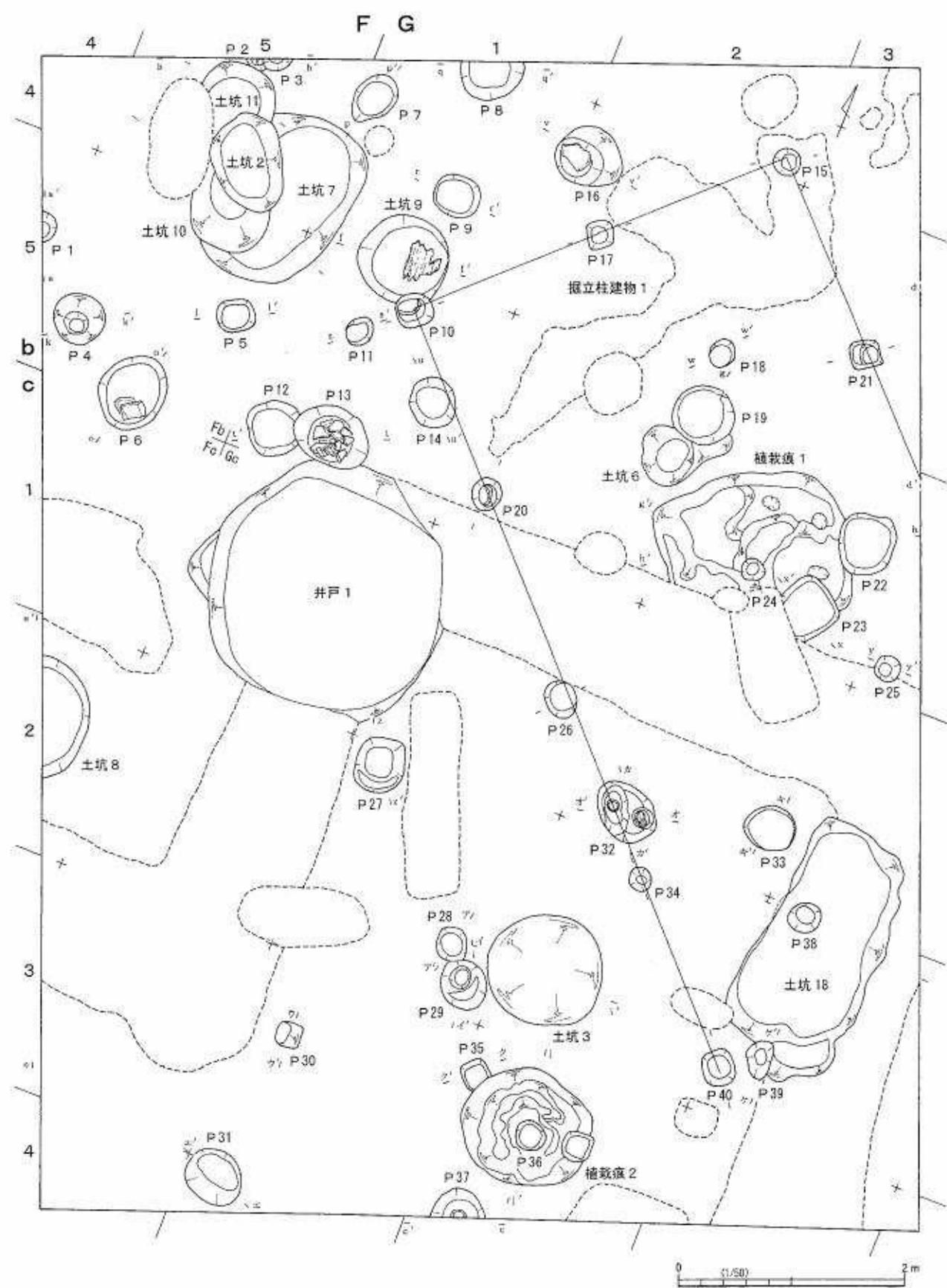
るものも含む。18世紀以降の近世後半の遺構を検出した。IV層は近世前半期および、古代・中世の遺物を含む。これを除去したV層上面を第2面とし、ここで中世・近世前半の遺構を検出した。調査区の南東部でIV層の堆積が薄く、地山のV層上面がやや高くなっている箇所があり、そこでは第1面相当と第2面相当の遺構を同じ面で記録した。よって、この範囲の遺構は切り合いや埋土の特徴、出土遺物から総合的に判断し所属時期を決定した。遺構や搅乱の底面で検出した別の掘り込みについても同様である。北壁側はIV層の堆積が厚く細分も可能であったが、細分した層は波打っており、遺構の識別が可能となるのはIVd層の上面である。V層以下は調査区周辺の基礎層にあたるシルト・砂・細砂・粘土層で、VI層からの湧水が著しく、V層の上部7.2m付近まで滲水した。

3. 第1面検出の遺構

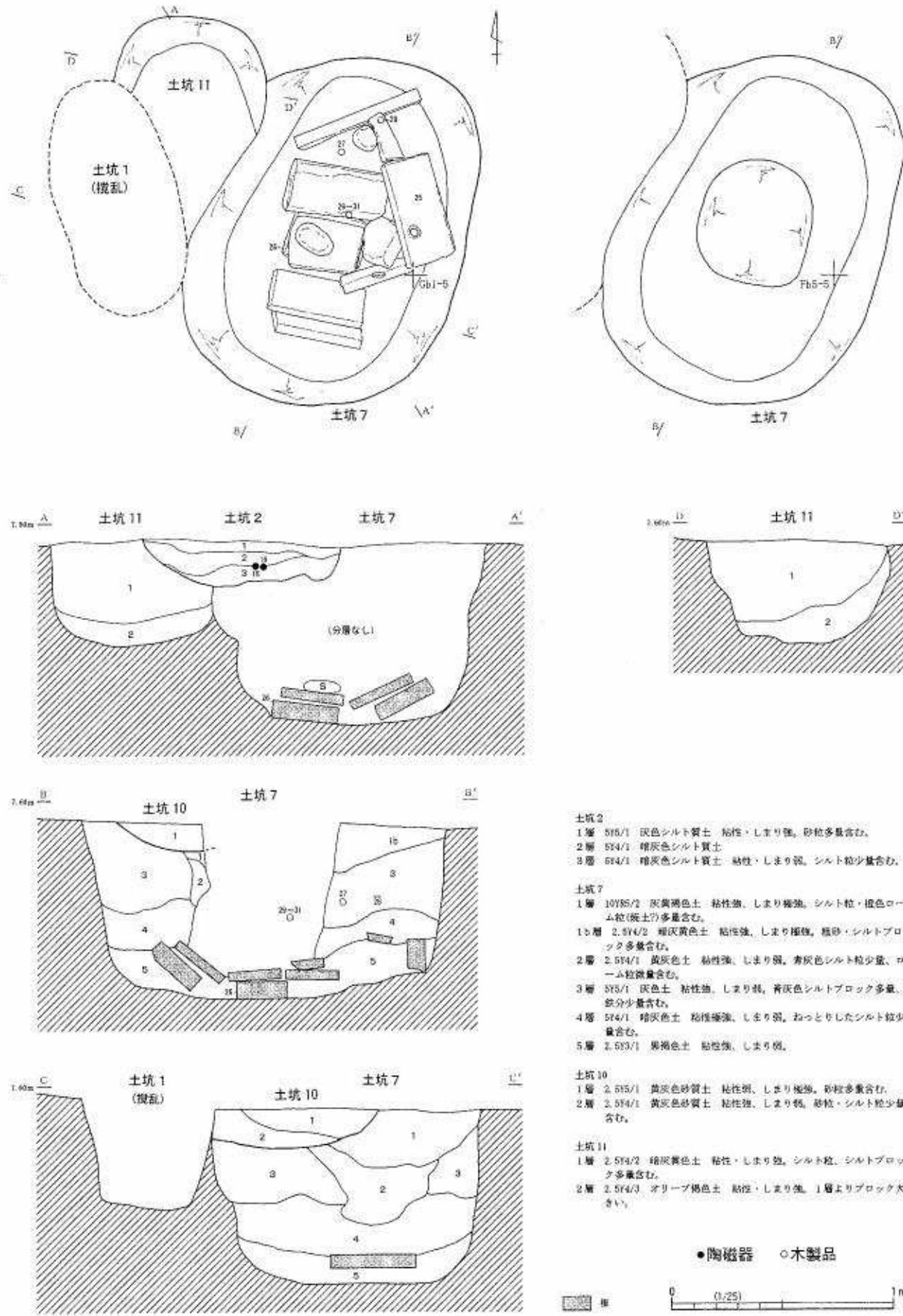
遺構は土坑・井戸・植栽痕・溝・ピットに区分し、ピット以外は検出順に通し番号を付した。掘削後、搅乱と判明したもの、名称を変更した遺構については番号を欠番とした。ピットは径60cm前後よりも小さなものと対象とし、断面の形状や、礎盤などが検出されたことにより、柱・杭などを設置した穴と想定した。検出順に番号を



第4図 基本層序

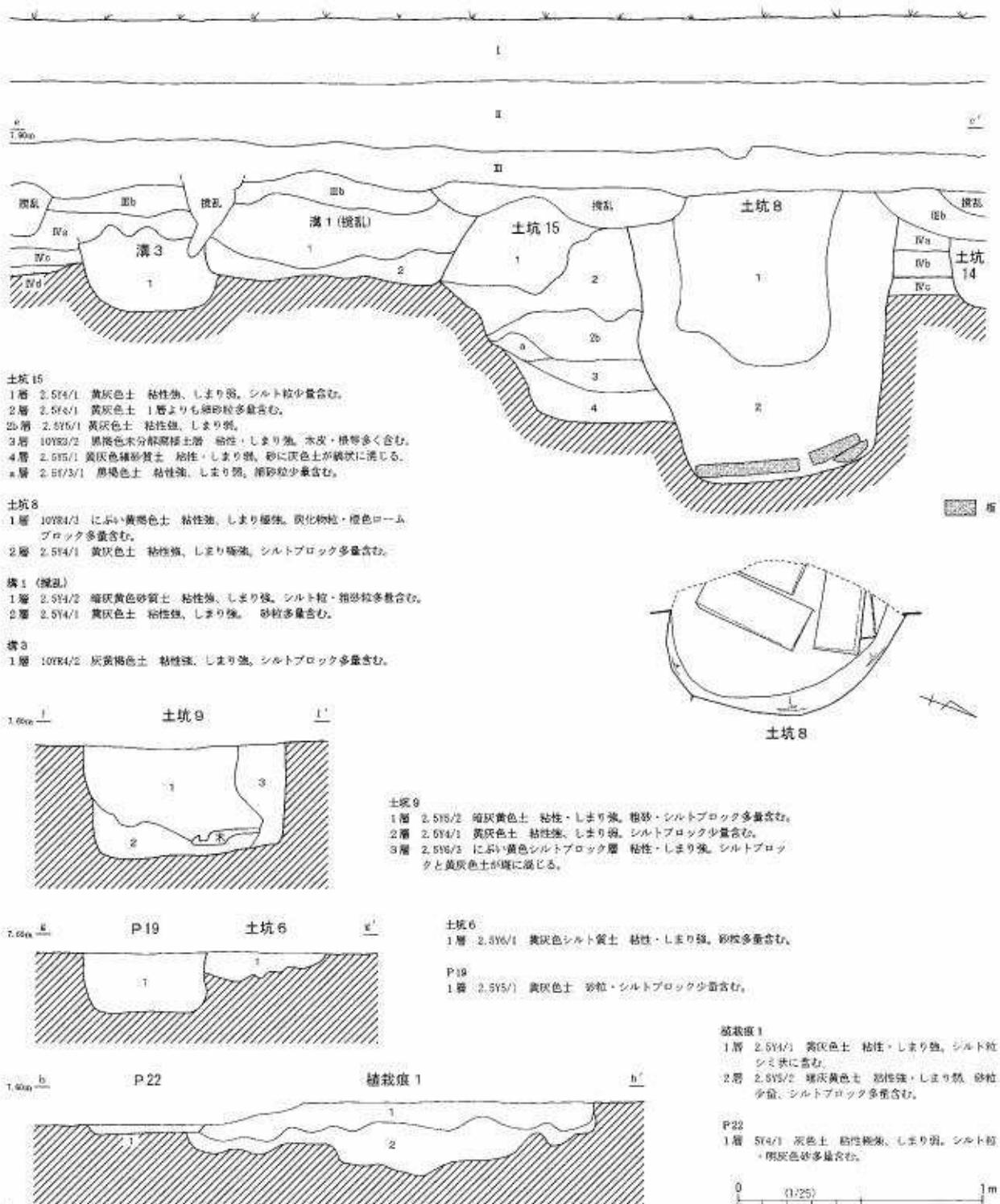


第5図 第1面全体図



第6図 第1面の土坑 (1)

付し、調査終了後番号を検出面、グリッド順に振り直した。掘立建物・柱穴列の柱穴と判定したものは、別途遺構単位で番号を付し併記した。調査範囲が狭く、建物の全体を復元することができなかつたため、面積・主軸等の情報は提示していない。植栽痕は平面形が不定形で底面に細かな窪みが集まつた形状の落ち込みを呼称した。埋土上に橙色ローム粒などの搬入土のブロックを含み、土ごと植樹された根の痕跡とみられるため、他の樹木の植生痕と区別した。各遺構の計測値や切り合は表1に示した。出土遺物は第16・17図に示したほか、図化できない微細な陶磁器片は、産地・大まかな時期が分かるものについて表1に記述した。

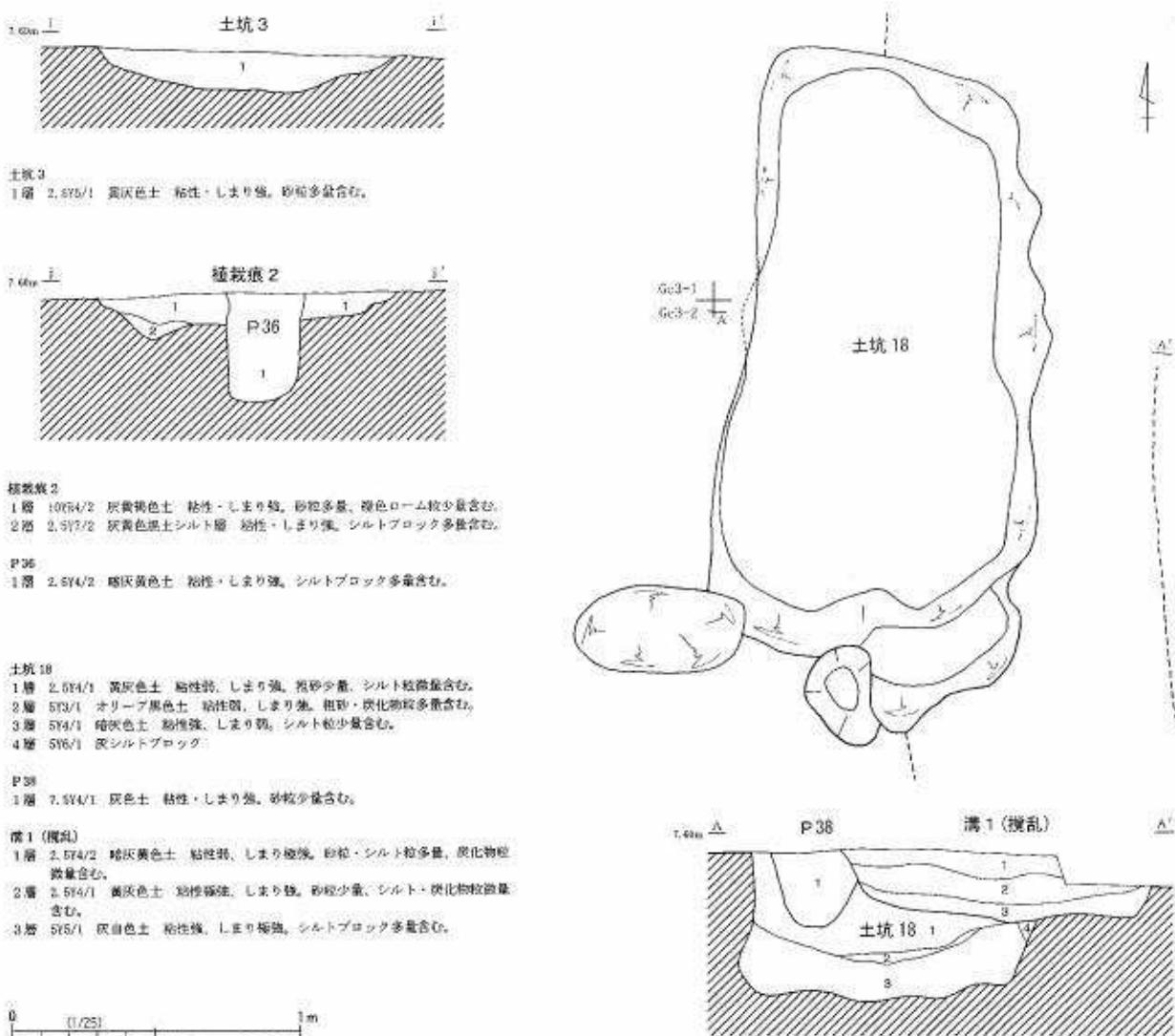


第7図 第1面の土坑 (2)

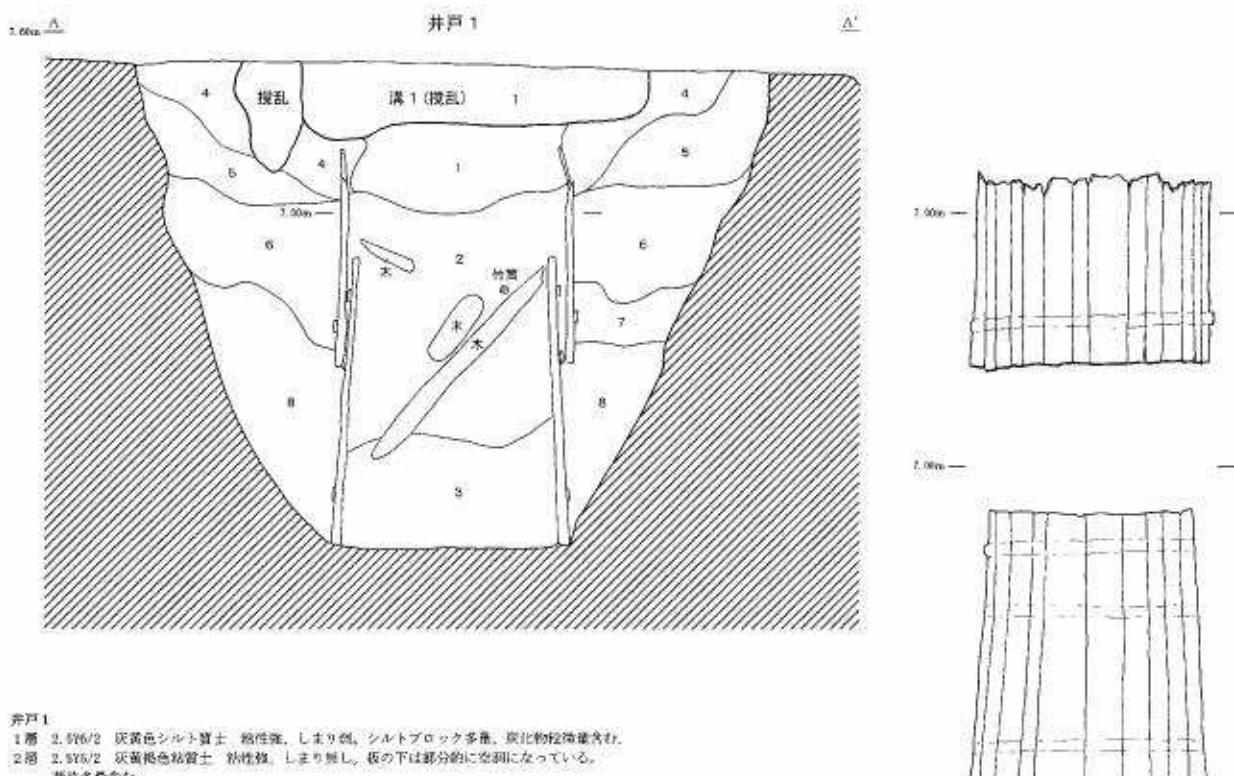
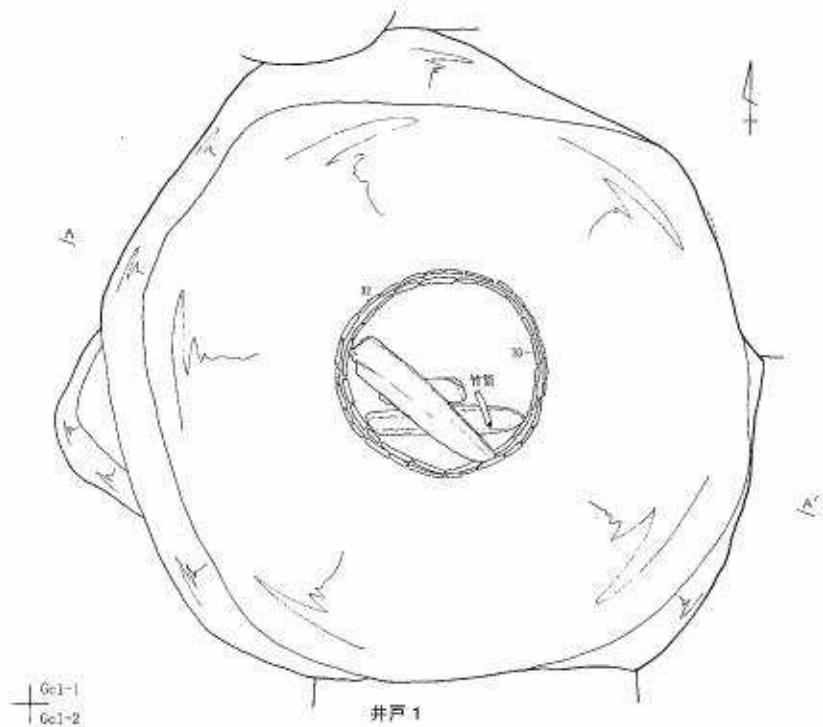
第1面では土坑9基、井戸1基、植栽痕2基、ピット40基を検出し、掘立柱建物1棟を復元した（第5～11図）。第1面の遺構埋土は、灰色・黄灰色系の砂質土を主体とするものが多い。

土坑は梢円形で長軸100cm弱、短軸との比が3対2程度のもの（土坑2・10・11）、直径が100cm前後の円形で深さが20cm弱の浅いもの（土坑3）、径100cm前後で深さ80cm以上のもの（土坑7・8）などがある。これらの土坑から出土した遺物は17世紀代の陶器類を含むものの、最新は18世紀後半以降であった。陶磁器類は細片が多い（第15・16図）。

土坑2は周辺で重複する土坑との切り合いが最も新しく、磁器皿（16）・陶器碗（18）・肥前陶器甕（20）が出土した。土坑7・8はやや大きな土坑で中央部に堆積した1層に焼土もしくはローム粒を含み、周囲よりも特に堅く縮まっている。中層から下層に板材がまとまって出土している点が特徴的である（第6・7図）。板材は鋸で切断後、表面をチョウナではつて形状をそろえており、一部は節を抜いている。樹種固定の結果、アスナロ材と判明した。柱の礎盤と根固めという見方も可能だが、1層を柱の抜き取り痕と捉えるにはあまりにしまっており、土坑7と土坑8の間隔も5mと広く、大型建物の柱穴と捉えるには躊躇する。板材は、江戸後期以降の御作事所で使用する建築部材・調度品類の素材として加工され、何らかの理由で埋納もしくは廃棄されたものかもしれない。土坑7は切り合いが著しく、土坑11→土坑7→土坑10→土坑2の順に構築されていた。土坑7の中層からは木簡が2点（27・28）、扇の骨（29～31）が出土している。28は正徳年号（1711～1716年）の習書と考えられる

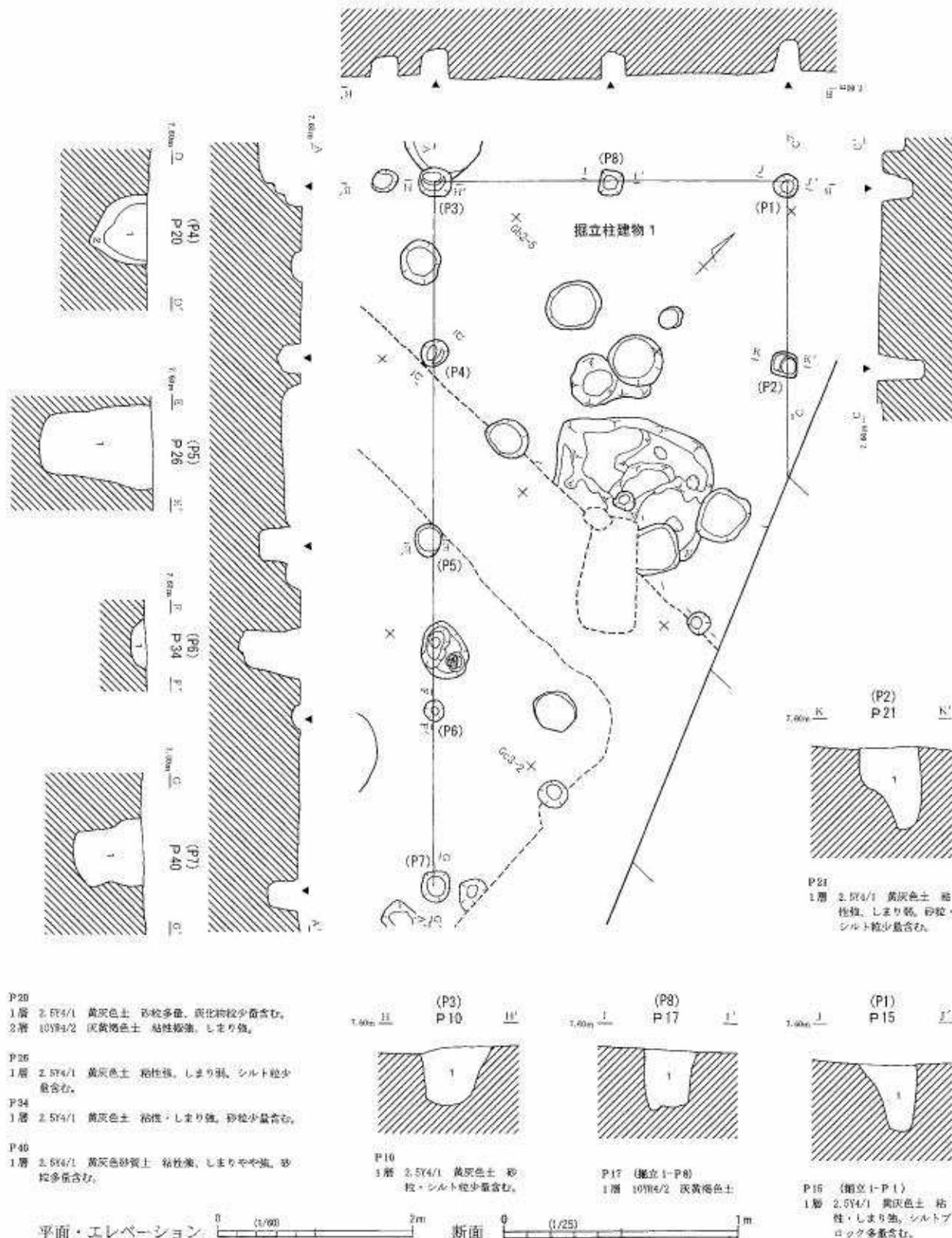


第8図 第1面の土坑（3）

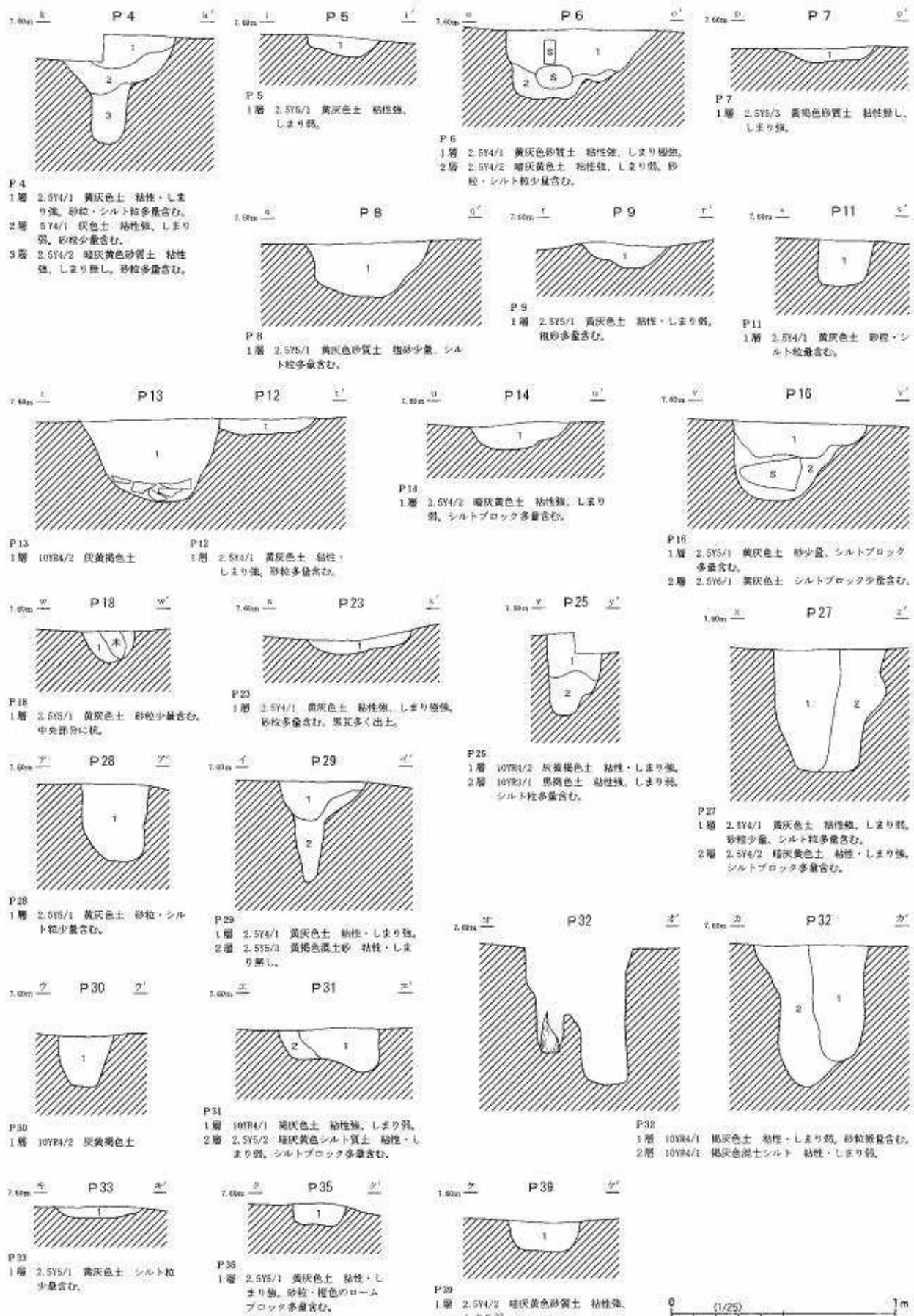


第9図 井戸1

が、出土した陶器碗（18）が19世紀頃と年代が離れている。土坑8も陶器土瓶小片、鉄袖の陶器壺片が出土している。土坑9は底面に礎盤の板を持ち、その上に堆積した1層は柱の抜き取り痕とみられる。周辺のピットよりもやや大きいため土坑に分類したが、P6・13・16など、中に礎盤石をもつピットとともに建物の一部を構成していたとみられる。土坑6は上部の形状が不定形で搅乱とも考えられる。重複するP19よりも先行する。土坑18



第10図 据立柱建物(1)



第11図 第1面のピット

は東半部が溝 1(搅乱)に埋され、西半部はV層上面で確認した。付近はIV層の堆積が薄く、埋土や出土遺物の特徴から第1面相当と判断した。平面は長方形を基調とし、一部掘り込みがオーバーハングする。

井戸 1 は調査区の中央西寄りに位置し、上層を搅乱の溝 1 に切られている。搅乱の埋土を除去後、井戸側埋土と掘り方の形状を確認し(図版 2)、井戸側の中心線を通るように半截した。この結果、穴の中央に結物が上下 2 段に重ねて設置されていた。井戸側の上段は上部が腐食により失われている。結物の内径は上段の下端が 70cm、下段の上端が 60cm、下端が 72cm である。井戸側内から 19 世紀代の磁器碗(17)が出土し、中層から下層にかけての埋土は炭化材・炭化物を含んでいた。井戸側の下段は下端が地山の粘土・砂層に食い込んでおり、著しい湧水のため底面の形状を正確に記録できなかったものの、上から打ち込まれていたとみられる。底面付近には未分解腐植土に混じって炭化物が多く堆積し、水の浄化を意図した可能性があろう。また、中層付近で竹筒が縦方向に入っていた。井戸埋めの民俗例にある、「息抜き」をおこなったとみられるが、掘削途中の崩落により竹筒が失われ、詳細は不明である。井戸側を設置する際の掘り方からは 17 世紀代とみられる肥前陶器碗(11)、17 世紀初頭の青花碗(13)、越中瀬戸播鉢(22)が出土した。

植栽痕 1 は径 160cm 前後、植栽痕 2 は径 110cm 前後で深さはいずれも 30cm 強である。底面の凹凸が著しく、中央部付近に植栽痕に後続するピット(P24・P36)が認められる。

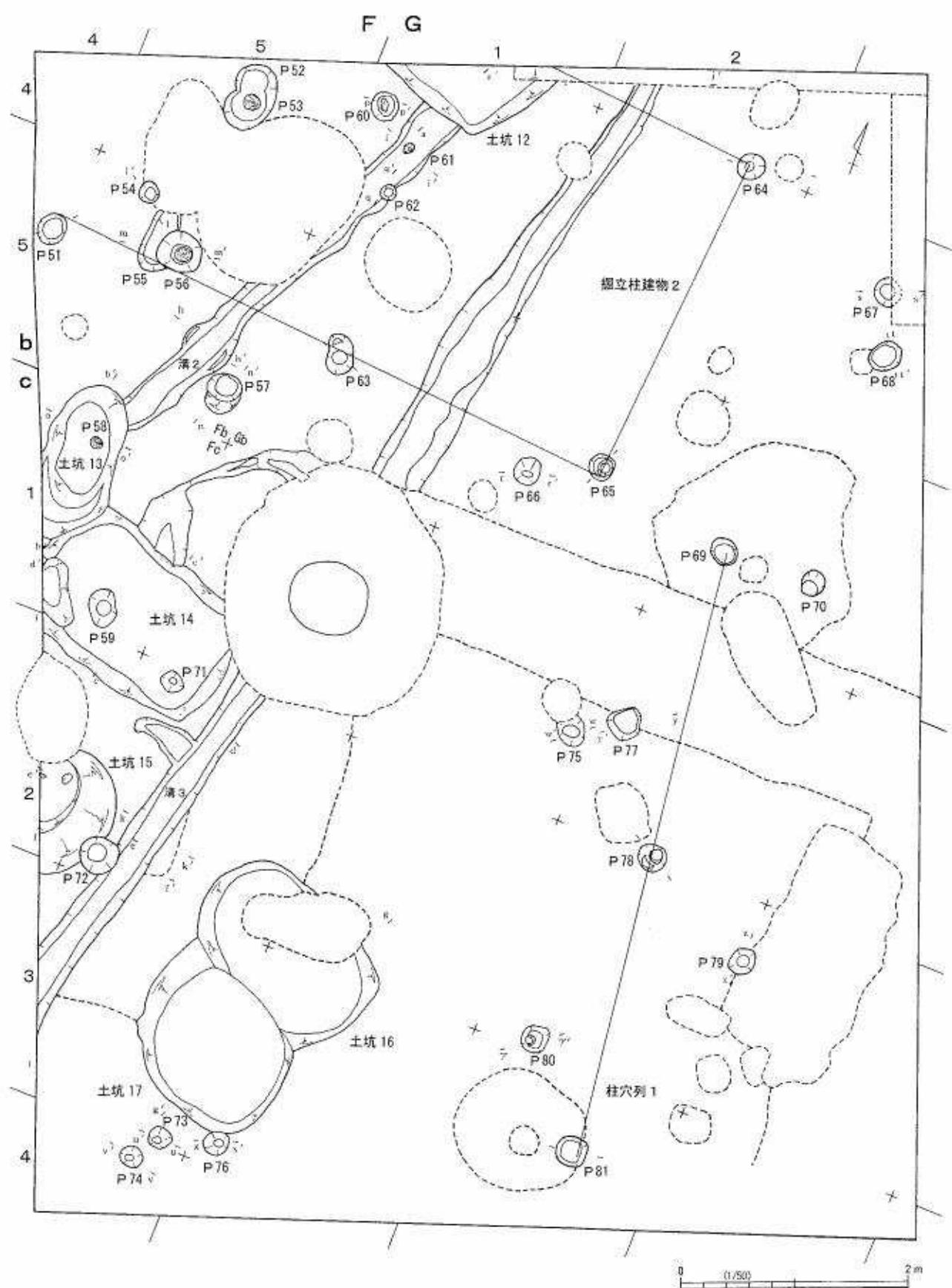
掘立柱建物 1 は、調査区の東壁寄りで検出した。東側は調査区外へ延びる。把握できた規模は 2 間 × 4 間で、中間寸法は 180cm、北西一南東方向に長軸をもつ。柱穴は径が 30cm 前後、深さは 7 ~ 46cm と幅があった。P21 から青花碗(14)が出土した。ほかに P8・土坑 9・P13 を結ぶラインと P13・P6 を結ぶラインで同規模のピット土坑が並び、掘立柱建物の可能性を検討したものの、礎盤の板・石を結ぶ南北軸と東西軸が直交しないため、今後、北西側の状況を見て判断したい。

ピットは柱根を持つもの(P18・P32)、中にやや大振りの石を礎盤として据えたもの(P6・P16)、割り石を底面に敷いたもの(P13)、脇に石が入るもの(P2)がある。

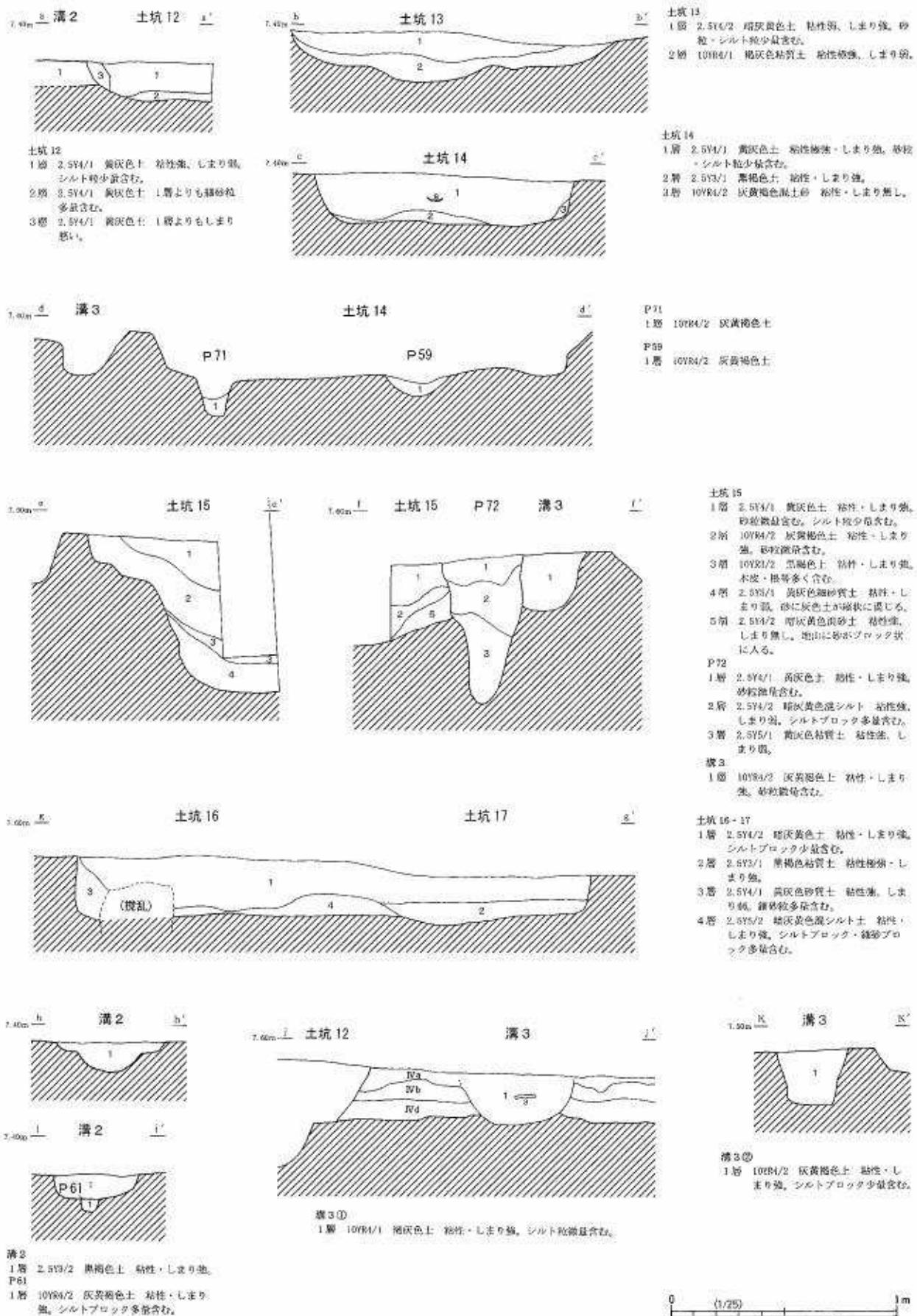
4. 第2面検出の遺構

第2面では土坑 6 基、溝 2 条、ピット 31 基を検出し、掘立柱建物 1 棟、柱穴列 1 列を復元した(第 12~15 図)。第2面検出の遺構埋土は、IVa・IVb 層に由来する灰黄褐色・灰黄色土、IVd 層に由来する黒褐色系の粘質土が主体で、第1面検出の遺構に比べ粗砂をほとんど含まない。また、第1面検出の井戸 1 西側から、土坑 14 の北壁、南東隅から溝 3 までの範囲で弧状に延びる溝状の落ち込みを検出した。これを掘削した結果、断面形状が不規則であり、井戸 1 の埋没に伴う崩落により生じたひび割れと判断した。

土坑は方形の土坑 12・14、楕円形で浅い土坑 13、円形で深い土坑 15、径が 170cm 前後の円形で深さが 20cm 前後の土坑 16・17 がある。土坑 14 は東西方向に長軸を持つ長方形で長辺 200cm 弱、短辺 120cm、深さ 20cm 前後で、壁の立ち上がりは急である。平坦な底面に柱穴状のピットを 2 箇所持ち、いずれも土坑と同時期か先行する。埋土からは黒瓦片(23)のほか 17 世紀初頭に位置付けられる瀬戸美濃志野丸皿(8)・肥前陶器丸皿(10)が出土している。新発田城跡出土の黒瓦は、第 8 地点での所見から 18 世紀以降に位置付けていた(鶴巻ほか 1997)が、第 22 地点の堀 3 で 17 世紀前半の遺物と伴出する例(津田ほか 2010)があり、本例と合わせ注意を要する。土坑 12 も同様の形状で 17 世紀初頭の肥前陶器片が出土している。土坑 15 はこの面で検出したが、第1面の溝 1(搅乱)、土坑 8、第2面の P72 に切られているため遺存状態が悪く、出土遺物に 19 世紀代に比定される陶器小片を含むため、P72 も含め、第1面相当とみるべきかもしれない。埋土の中層に木皮などの有機物を多く含む層が堆積した。



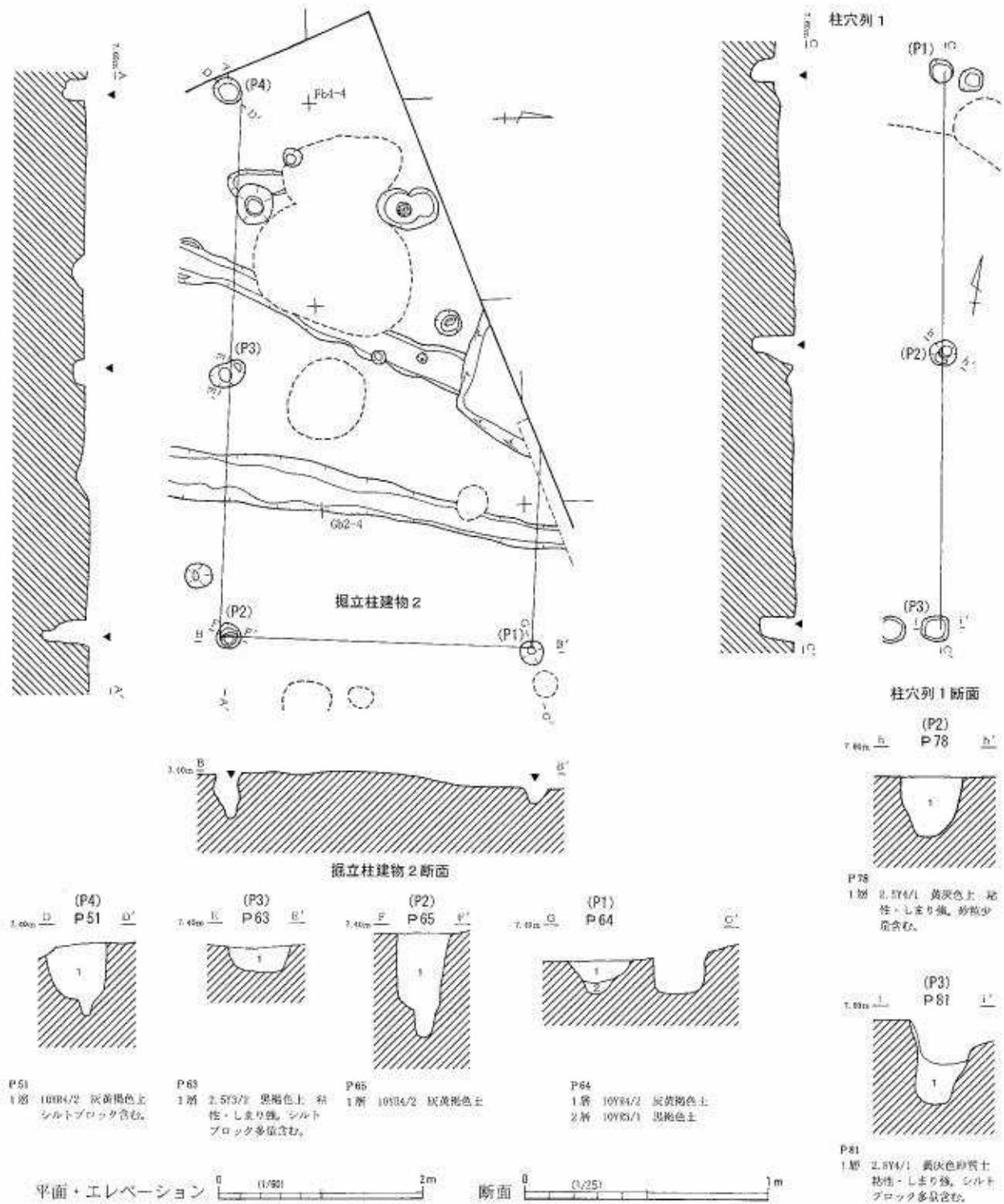
第12図 第2面全体図



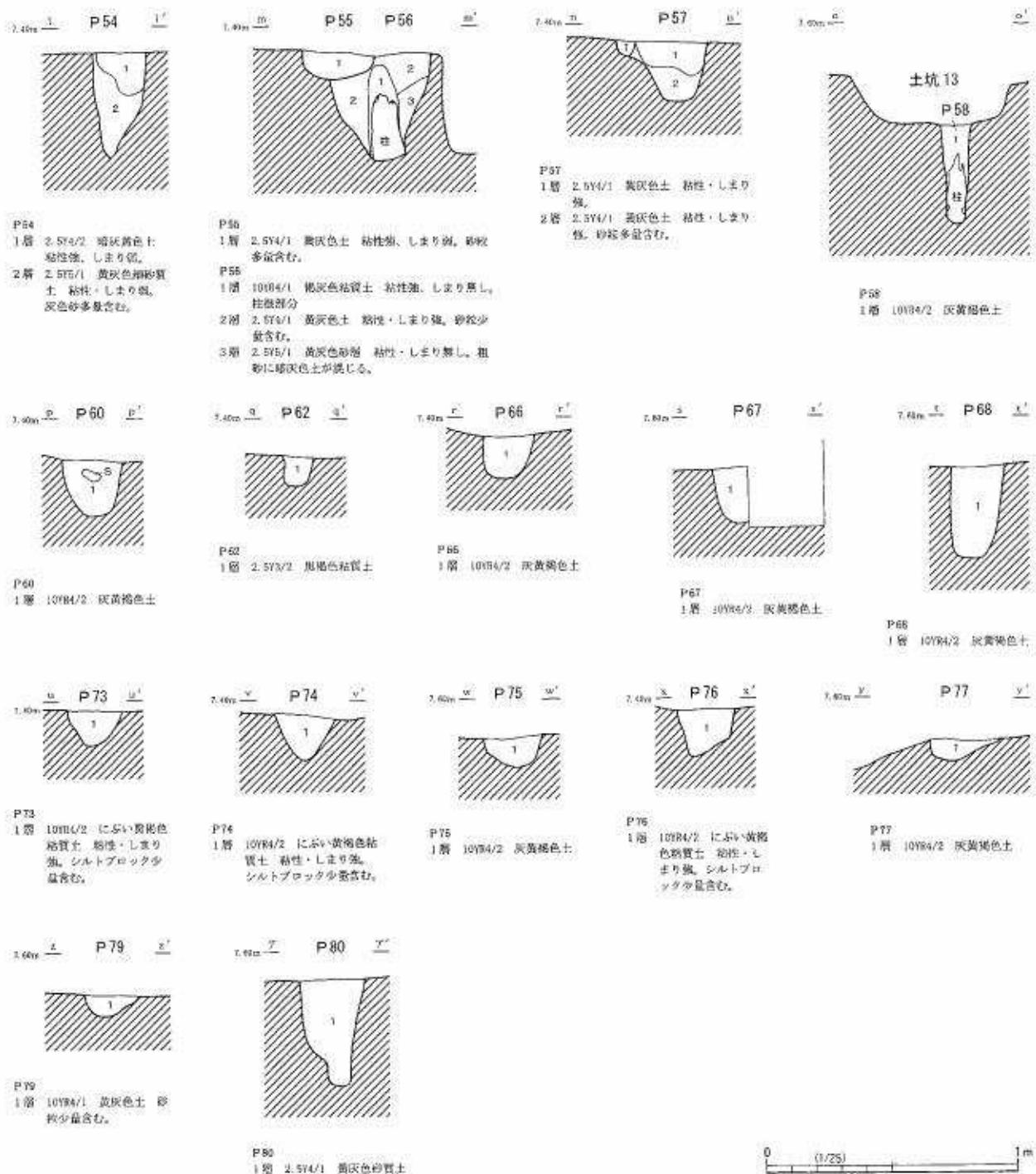
第13図 第2面の土坑・溝

ていた。土坑 16・17 は擾乱で壊されており、平面形から二つの穴が重複していると想定したが、断面観察の所見では 1 層が共通し、切り合は認められなかった。遺物は土坑 17 から V 期頃の肥前磁器碗小片が出土している。

溝 2 は調査区の北壁中央付近から、西壁中央にかけて検出した。第 1 面の土坑 7 に壊され、第 2 面の土坑 12・13 に先行する。底面で P61 を検出した。h-h' 付近でもピットとの切り合を想定したが、それ以外の掘り込みは検出されなかった。土坑 13 の底面で検出した P58 が溝 2 の延長上にあり、柱根が出土した。溝 3 は調査区北壁の東寄りから西壁の南寄りへと延び、方向は溝 2 よりもやや北に振れる。第 1 面検出の井戸 1・P16、第 2



第 14 図 掘立柱建物 2・柱穴列 1



第15図 第2面のピット

面のP72に先行する。北壁の壁面で越前甕片(3)が出土した。

掘立柱建物2は調査区の北西コーナー付近で検出し、短軸線はほぼ磁北に沿う。北西側が調査区外となる。南北1間以上、東西2間以上で、東西辺の柱間が260~280cm、南北の柱間が290cm程であった。柱穴の径は23~30cm、深さはP65が44cmと深く、ほかは12~27cmである。柱穴列1は調査区東・南壁寄りで南北方向に三つのピットを検出した。間隔は270cmで軸線は建物2の南北軸よりもやや西に振れる。調査区外に延びる建物の一部か。

表1 遺構一覧表

土坑											
遺構名	種 類 面	主なグ リッド	規模 (cm)			出土遺物	切り合ひ (旧→新・不明)	縫隙	断面	図版	
			長幅	短幅	深さ						
土坑2	1	Pb5-4	89	62	84	信楽系陶器片、陶器、漆器、磁器且(16)、鉢、土師器等	土坑11→土坑7→土坑10→土坑2	6	—		
土坑3	1	Gc3-2	105	100	16	瓦、瓦					
土坑6	1	Gb2-5	84	56	12	—	土坑6→P19				
土坑7	1	Pb5-6	165	121	80	2層陶器、町、 瓦(29~31)、3層 陶器、曲輪板 片、木棒(27~ 28)、板材(25~ 26)	土坑11→土坑7→ 土坑10・土坑2				
土坑8	1	Pc5-2	108	42	83	1層陶器土瓶、2 層陶器蓋、壁板 片、	土坑15→土坑8				
土坑9	1	Gb1-4	80	80	47	漆板、瓦片 (24)、焼拂、 鉢、近世陶片軸 用板状土製品	土坑9→P10	7	—		
土坑10	1	Pb5-5	86	70	18	平行手刷窓	土坑7→土坑10→ 土坑2				
土坑11	1	Pb5-4	73	70	47	更衣杯、絹紋陶 器蓋(17C)	土坑11→土坑7→ 土坑10・土坑2				
土坑12	2	Gc4-4	94	77	19	漆前陶器鉢 (17C切)	漆2→土坑12				
土坑13	2	Pc5-1	144	68	32	陶器蓋小片	漆2→土坑14→ 土坑13				
土坑14	2	Pc5-1	197	125	23	志野丸皿(8)、 志野陶器具 (10)、黑瓦(23)	土坑14→土坑13	12	3		

ピット											
遺 構 名	種 類 面	主なグ リッド	規模 (cm)			出土遺物	種物	切り合ひ (旧→新・不明)	縫隙	断面	図版
			長幅	短幅	深さ		柱穴列				
1	1	Pb4-5	28	12	21				6	3	
2	1	Pb5-4	14	12	25	根固め石		P2→P3、P3とは掘 り込み面が異なる。			
3	1	Pb5-4	26	13	25	—		P2→P3、P3とは掘 り込み面が異なる。			
4	1	Pb5-5	47	47	50						
5	1	Pb5-6	34	29	21	瀬戸美濃 天日茶碗 (中世後 期)					
6	1	Pb5-5	62	65	23	根固め石			11	3	
7	1	Gb1-4	49	35	20	—					
8	1	Gb1-4	58	34	27	陶器鉢 (17C)					
9	1	Gb1-4	43	38	12	—					
10	1	Gb1-5	33	31	27	—	獨立1P3	土坑9→P10			
11	1	Gb1-5	26	24	21	—			5	3	
12	1	Gb1-5	50	47	10	土引鉢	P12→P13				
13	1	Gb1-6	71	52	32	石、すり 鉢		P12→P13、P13→ 漆1			
14	1	Gb1-6	46	42	12	大窓丸 皿					
15	1	Gb2-3	25	26	34	高級鉢 鉢	獨立1P1				
16	1	Gb2-4	62	55	24	漆鑲石、 漆器鉢 (18C)			10	10	
17	1	Gb2-4	28	23	38	—	獨立1P3				
18	1	Gb2-4	27	23	23	—					
19	1	Gb2-5	56	53	24	—					
20	1	Gb2-5	30	27	24	—	獨立1P4				
21	1	Gc3-4	26	24	43	青花片 (17C)	獨立1P2	P58→P21	10	10	
22	1	Gc3-5	55	50	7	—					
23	1	Gc3-5	50	45	9	墨瓦					
24	2	Gb3-5	22	20	33	—					
25	1	Gb4-5	23	23	40	—	漆1→P55				
26	1	Gc2-1	35	28	47	—	獨立1P5		10	10	
27	1	Gc2-2	60	45	50	信楽系陶 器蓋(19 C)					
28	1	Gc2-2	31	28	37	—					
29	1	Gc2-2	48	40	39	信楽系陶 器蓋(19 C)					
30	1	Gc2-3	24	23	28	—					

縫隙											
遺構名	縫 隙 面	主なグ リッド	規模 (cm)			出土遺物	種物	切り合ひ (旧→新・不明)	縫隙	断面	図版
			長幅	短幅	深さ		柱穴列				
土坑15	2	Pc5-2	110	77	72	筒形漆器柄、古 耳、破片小片		土坑15→P72、土 坑15→土坑8	12	13	—
土坑16	2	Gc2-3	176	113	28	—		土坑16→P72、土 坑16→土坑17		13	—
土坑17	2	Gc1-3	181	121	23	漆小器蓋		土坑16→土坑17		13	—
土坑18	2	Gc4-2	208	113	31	漆前漆器蓋(19 世纪)、紀州漆 器蓋、陶器蓋、黑 瓦		土坑18→P79、 P99、土坑18→P38		5・8	2
植栽痕											
植栽痕1	1	Gb3-1	164	165	32	青花碗、瀬戸美 濃皿、出刃丸皿 (7)、磁器片、 陶器片、黒瓦		植栽痕1→P22、 植栽痕1→P23	5	7	—
植栽痕2	1	Gc3-3	118	104	38	陶器板、鉢、色 絵漆器皿		P31→植栽痕2→ P35、植栽痕2→ P36		8	2
溝											
溝1	1	Gc1-2~ Gc2-4	1829	102	28	黒吹瓦、土師器 片、漆器、瓦質 火鉢		溝2→土坑7・8 土坑12、土坑13溝 2~P62	12	13	—
溝2	2	Pb2-5~ Gb1-4	446	24	17	—					
溝3	2	Gc2-3~ Gb1-3	788	26	26	城南裏(1EC後 半)		溝3→井戸1・溝3 →P16、溝3→P72		3	
井戸											
井戸1	1	Gc1-1	230	200	165	木箱内: 信楽碗 (19C)、板方: 漆器皿(17C)、青 花碗(元初)越 中瀬戸寸引鉢 (22)		井戸1→井戸1土 坑14→井戸1	5	9	2

P53・P56・P58も等間隔で柱根が並び、柱穴列とみられる。

ピットは第1面のものよりもやや小ぶりのものが多く、P60内で礫が出土した。

5. 出土遺物

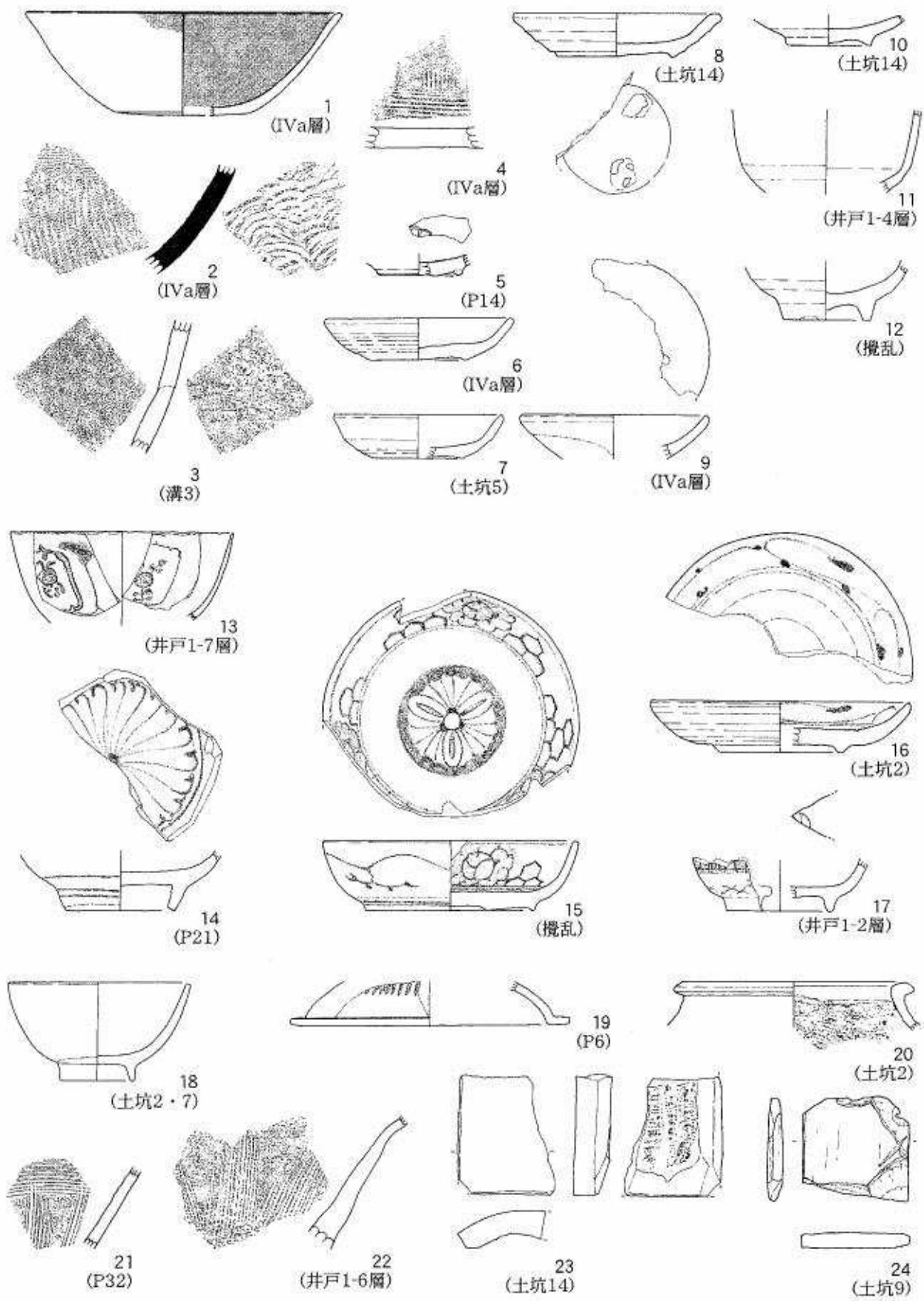
遺物は陶磁器類・屋根瓦が平箱4箱、石製品・金属製品が1/10箱、木製品が5箱分出土した。III層・搅乱からの出土が多く、遺構からの出土は少ない。金属製品は和釘が出土したが、状態がよいものはなく図示しなかった（第16・17図、図版3・4）。

1は内面黒色の土師器無台碗。2は在地産の須恵器甕片である。いずれもIV層から出土し、1が9世紀中頃～後半頃、2が8～9世紀頃に比定される（新潟古代土器研究会 2004）。3は中世の越前甕、4はすり鉢で、内底面に十字のすり目を持つ。3が15世紀後半頃、4は16世紀頃に比定される（福井県教育委員会 1983）。5～8は大窯期の瀬戸美濃皿類である（藤澤 2002）。5は見込みに印花文を持つ端反り皿もしくは丸皿、6は見込みが丸く釉剥ぎした内ソギ皿、7が丸皿、8が志野丸皿である。5が15世紀末から16世紀前半頃、6～8が16世紀後半～17世紀初頭に比定される。9～12が肥前陶器の碗皿類で、9・10がⅠ期の丸皿、11・12がⅡ期頃の碗である。13・14は青花碗で13は景德鎮系のI₁類（森 1995）、14は類例を見いだせなかったが、高台の形態や、釉調から漳州窯系の碗と判断した。いずれも17世紀初頭～前半頃に比定されよう。

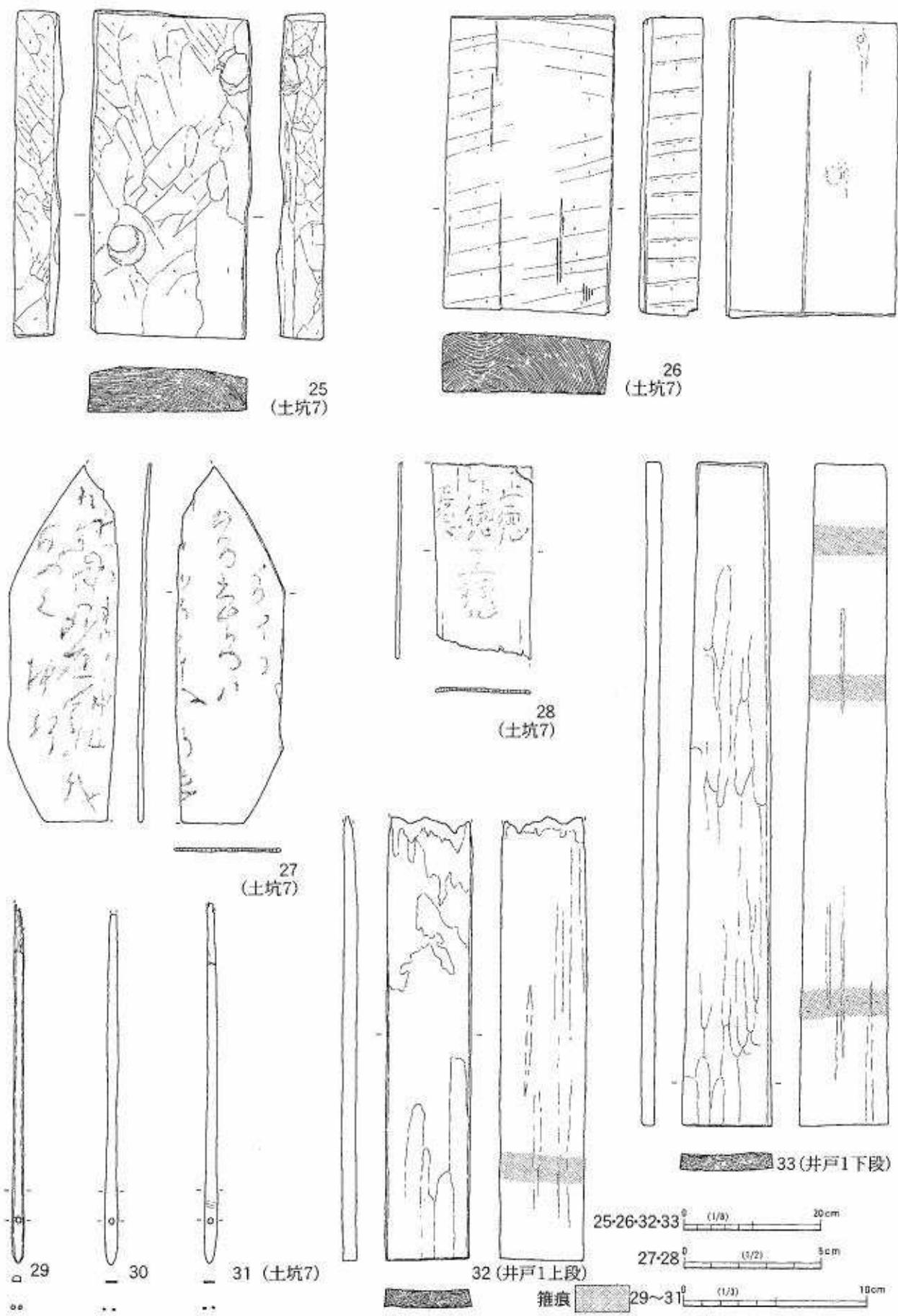
15～17は九州産の磁器碗皿類で、15が肥前の深皿、16が波佐見系の五寸皿、17が肥前の湯呑碗で、15・17が19世紀前半、16が18世紀後半に比定される（九州近世陶磁学会 2000）。18は京・信楽系の半球碗、19は产地不明の行平鍋蓋で、いずれも19世紀頃に比定される。20・21は肥前陶器の甕・すり鉢でいずれも17世紀前半頃に比定される。22は鋸釉が施されたすり鉢で、口縁直下が外反する。胎土に砂粒を多く含み、17世紀初頭の越中瀬戸とみられる（宮田 1997）。23は黒焼による丸瓦で、側端部の内側が面取りされている。24は鳴滝産の仕上げ砥である。

木製品は土坑7・8から出土した板材・木筒・扇の骨と、井戸1の井戸側材などである（第16図・図版4）。板材は土坑7から出土した2点のみを図示した（25・26）。長辺45cm、短辺25cm前後、厚さ5～8cmの板目材で、小口部と表裏のどちらかに鋸による製材痕、表裏面のどちらかと側面にチョウナによる粗削り面が残る。チョウナ痕は節の周辺で方向を変えているもの（25）、斜方向に規則的に施されたもの（26）がある。チョウナ痕の刃部幅は9cm程度である。樹種同定の結果アスナロ材と判明した。27・28は土坑7から出土した木筒で、いずれもアスナロの柾目材であった。27は下端部が直線、実測図右の右上辺、右下辺が弧状に削られている。表裏面に複数行の墨痕がある。28は短冊形を呈し、下端部を欠損する。左側縁も欠損している。上部に三行、その下に1行で「正徳」を四つ記載している。29～31は竹製の扇の骨で、土坑7の2層中からまとまって出土した10点（図版4）のうち3点を図示した。1個体分とみられるが、紙面・要の留め具は発見できなかった。いずれも先端部が欠損しているため、本来の長さは不明である。幅0.6cm、厚さが0.25cmのものが2点、0.08cm前後のものが8点ある。前者が扇の側端部であろう。下端から1.6cm付近に径0.2cmで穿孔されている。

32・33は井戸1の井戸側に用いられた結物の檣板で、32が上段、33が下段である。実測図の天地は検出時の上下方向に対応する。上段の結物は26片、下段は22片の檣板を竹籠で固定していた。檣板はいずれも杉の板目材を用い、木表が外側となるようにしている。内面に「銛」と呼ばれる工具で削られた、槍鉋と同様の工具痕が縦方向に残る。側面は鉋により平滑に仕上げている。外面は、上段の32が一段、下段の33が三段の編み竹による籠の圧痕が残る。調査時に竹籠は残っていたが、記録中にはどけ、籠は失われた。通常、結物の桶や樽であれば、内側の上下端部付近に底板・蓋板を取り付けるための鉋痕・木殺しの痕跡が残るが、これらの痕跡や底板・蓋板の圧痕がなく、井戸側専用に作られた底板・蓋板を持たない結物とみられる。



第16図 出土遺物 (1)



第17図 出土遺物 (2)

表2 遺物観察表

遺物番号	遺構・土層	グリッド	種類	器種	法量(cm)			時期	手 法	遺存	生産地	種別	国版
					口径	底径	器高						
1.	IVa層	Pb5-5	土器	無古縫	16.8	7.0	6.5	9C 中～後	内面墨色處理。マクロ成形、外腹側部下半から底面は削成のクロロ削り。内面・口縁部損なび。	1/2	在庫		3
2.	IVa層	Gb2-4	須恵器	甌	—	—	—	8～9C	側面片。内面同心円当て具。外腹平行叩き目。長石・石英多。	破片	横神		
3.	萬3-1層	Gc2-1	陶器	甌	—	—	—	15C後半	側面片。長石少。	破片	越前		4
4.	IVa層	Gb1-4	陶器	オリ鉢	—	—	—	16C	底部。底面十字ナリ目。底面無遮蔽。焼成不良。	破片	越前		
5.	P14-1層	Gb1-5	陶器	丸皿小縁反皿	—	3.8	—	16C末	灰釉全面施釉。内面印花文。付け高台。	1/4	瀬戸美濃		
6.	IVa層	Gb1-5	陶器	内ハギ皿	10.0	4.7	2.25	16C末	大腹3段。B縁も群。灰釉全面施釉。見込み相持ぎ。高台内削り込み。輪トテ板。	1/2	瀬戸美濃		3
7.	土坑5-2層 土坑5-3層	Gb2-6	陶器	丸皿	9.0	4.8	2.35	16C末	大腹4前。B縁。灰釉全面施釉。透明がかった灰釉。	1/4	瀬戸美濃		4
8.	土坑14-1層	Pc5-1	陶器	志野丸皿	11.0	6.5	2.3	17C初	大腹4米。C縁。表面釉全面施釉。削出し高台。	1/2	瀬戸美濃		3
9.	IVa層	Pc5-1	陶器	丸皿	9.8	—	—	17C初	I縁。灰釉。高台周辺無釉。見込みに粘土目。	1/3	肥前		4
10.	土坑14-1層	Pc5-1	陶器	丸皿	4.5	—	—	17C初	I縁。灰釉。高台周辺無釉。	1/4	肥前		
11.	井戸1-4層	Gc1-1	陶器	碗	—	—	—	17C前	II崩壊。透明がかった白釉碗(長石?)	破片	肥前		
12.	溝1-2層 (鉄乱)	Gc1-2	陶器	碗	—	—	4.5	—	II～III崩壊。灰釉。高台周辺無釉。	1/6	肥前		3
13.	井戸1-7層	Gc1-1	磁器	碗	11.8	—	—	17C初	素地模様葵花1.群。笠押し。青花手タイプ。区间内に花文・草葉文。	2/3以上	中国		16
14.	P23-1層	Gb3-4	磁器	碗	—	5.7	—	17C	線州窑青花葵花。高台端から高台内無釉。外腹圓錐。内面見込みねじ花文。高台内壁付着。	2/3以上	中国		4
15.	鉄乱	Fe	磁器	深皿	13.7	9.0	3.7	18C前	V期(1810～1860年代)。蛇の目四形高台。見込みに三方刺繡文風の花文。作部内面龜甲文+牡丹文。体部外面唐草文。	4/6	肥前		
16.	特土	—	磁器	五寸皿	13.6	6.6	2.7	18C後	V-2期。高台模様無釉。見込み蛇の目釉新高。内面唐草文。	1/2	模倣見		
17.	土坑2-1層 土坑2-2層	Pb5-4	磁器	五寸皿	13.6	6.6	2.7	18C後	V-2期。高台模様無釉。見込み蛇の目釉新高。内面唐草文。	1/8	肥前		
18.	土坑2-3層 土坑7-3層	Pb5-4	陶器	半球碗	9.6	3.9	5.2	18～19C	青味がかった白釉碗。	ほぼ完形	常滑・信楽		
19.	P5-2層	Pb5-5	陶器	行平器皿	15.0	—	—	19C	外腹トビカンナ。口絞款式化粧。内面透射釉。	1/8	不明		
20.	土坑2-1層	Pb5-4	陶器	小型瓶	17.0	—	—	19C	無釉。内面脚部同心円当て具頭。	1/8	肥前		
21.	P32-1層	Gc3-1	陶器	ナリ鉢	—	—	—	17C前	無釉。内面下半放射状、上半水平方向ナリ目。	破片	肥前		
22.	井戸1-6層	Gc1-1	陶器	ナリ鉢	—	—	—	17C前	A縁。無釉。内面放射状ナリ目。長石多。口縁直下がやや外傾する。	破片	越中戸河		
23.	土坑14-1層	Lt2-4	瓦	丸瓦	—	—	厚さ 1.7	—	黒焼し瓦。内面コピキB+布袋压痕。頭取りシャープ。	破片	在庫		
24.	土坑9-1層	Gb1-4	石製品	仕上砾	長さ (L.1)	幅 5.0	厚さ 0.8	近世	側面切削痕。	破片	鳴海		
25.	土坑7-4層	Gb1-4	木製品	板材	長さ 45.4	幅 23.0	厚さ 6.6	近世	上下端面端切削痕。上面・側面斜方方向(筋の周辺は多方角)のチウナ板(刃部幅9cm)。裏面端切削痕。	完形	樹脂 アスナロ		
26.	土坑7-4層	Lg4-1	木製品	板材	長さ 42.6	幅 24.9	厚さ 8.3	近世	上下端面端切削痕。上面・側面斜方方向のチウナ板(刃部幅12～13cm)。裏面端切削痕。	完形	樹脂 アスナロ		4
27.	土坑7-3層	Pb5-3	木製品	木箇	長さ (12.9)	幅 (3.6)	厚さ 0.1	近世	裏裏面に墨痕。削痕不明。右端右上と右下の隙部が刃物で削られ縦い状状呈す。下端は直線状に削られる。他の箇部は削れによる欠損。	—	樹脂 アスナロ		
28.	土坑7-3層	Pb5-3	木製品	木箇	長さ (7.1)	幅 (3.6)	厚さ 0.15	近世	表面に墨痕。「正徳」三行分の下に一行「正徳」の署名。矩形形を呈し、右上隅と下部が欠損。	—	樹脂 アスナロ		
29.	土坑7-2層	Pb5-3	木製品	木箇	(19.5)	0.6	0.25	近世	軸の側端部。同様の厚さの資料が全部で2点あり。	先端欠損	樹脂 竹		17
30.	土坑7-2層	Pb5-3	木製品	木箇	(19.1)	0.6	0.08	近世	表面に紙を覆る部分。同様の厚さの資料が全部で8点あり。	先端欠損	樹脂 竹		
31.	土坑7-2層	Pb5-3	木製品	木箇	(19.6)	0.6	0.07	近世	表面に紙を覆る部分。同様の厚さの資料が全部で8点あり。	先端欠損	樹脂 竹		
32.	井戸1	Gc1-1	木製品	井戸側板	(64.4)	12.6	2.5	近世	上端、板目取り。木表が外側。内面複数箇所の工具痕(鍛)。側面端板。外側に竹板約1箇所。	上端欠損	樹脂 竹		
33.	井戸1	Gc1-1	木製品	井戸側板	96.6	13.4	2.4	近世	下端、板目取り。木表が外側。内面複数箇所の工具痕(鍛)。側面端板。外側に竹板約3箇所。下端部は外ソギ穴に端部を面取り。内面に底板、蓋板を取り付けた痕跡なし。	完形	—		

6. 出土木製品の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

ここでは新発田城第24地点から出土した木製品の樹種同定を行なった。

（2）試料と方法

試料は、江戸時代末期の土坑である土坑7から6点、井戸跡である井戸1から1点の、計7点の出土木製品である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面、接線断面、放射断面からカミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。なお、作製したプレパラートは新発田市教育委員会に保管されている。

（3）結果

同定の結果、針葉樹のスギとアスナロの2分類群と、単子葉のタケ亜科1分類群の、計3分類群が産出した。アスナロが最も多く4点で、タケ亜科が2点、スギが1点であった。同定結果を表3に示す。図版に各樹種の光学顕微鏡写真を示すが、同定された材の特徴記載は、紙面の都合上割愛する。

（4）考察

木筒と板はいずれもアスナロであり、扇はタケ亜科、桶はスギであった。アスナロとスギは共に木理通直で素直に成長しやすく、加工性が良い。またアスナロは、耐朽性が特に高い樹種である。こうした材質を考慮した上で、板や木筒などの木製品に用いられていたと考えられる。タケ亜科は、通直な材で弾力性、割裂性に優れており、扇の骨部への利用に適している。

木製品の木取りは、板と桶はいずれも板目、扇は分割削り出し、木筒は柾目取りであった。木材では、柾目材の場合は年輪と直交して材を切り出すため、歩留まり（製材効率）は悪いが収縮や変形が少なく、板目材の場合は年輪に沿って材を切り出すため、歩留まりは良いが長い年月を経ると収縮・変形しやすい性質があり、木材には反りが生じやすい。アスナロの木筒では材の変形を避けるため柾目材を、アスナロの板やスギの桶では、歩留まりを良くするために板目材を用いていた可能性が考えられる。

表3 出土木製品の樹種同定結果一覧

試料No.	遺物No.	出土遺構	層位	器種	樹種	木取り	備考
1	25	土坑7	4層	板	アスナロ	板目	厚板
2	26	土坑7	4層	板	アスナロ	板目	厚板
3	29	土坑7	2層	扇	タケ亜科	分割削り出し	扇の骨部
4	30	土坑7	2層	扇	タケ亜科	分割削り出し	扇の骨部
5	28	土坑7	3層	木筒	アスナロ	柾目	片面墨書きあり
6	27	土坑7	3層	木筒	アスナロ	柾目	両面墨書きあり
7	32	井戸1	2層	桶	スギ	板目	木表外側



第1面確認状況（北から）



第1面完掘状況（北から）

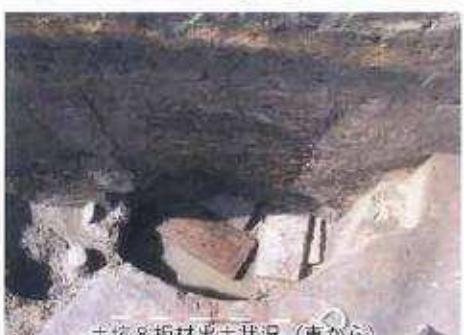
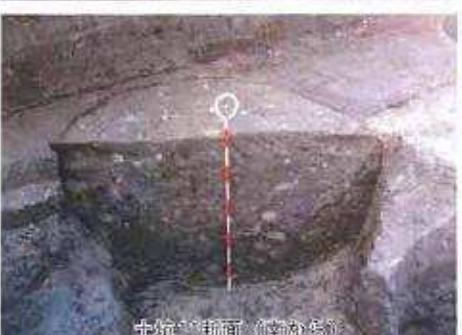


第2面完掘状況（北から）

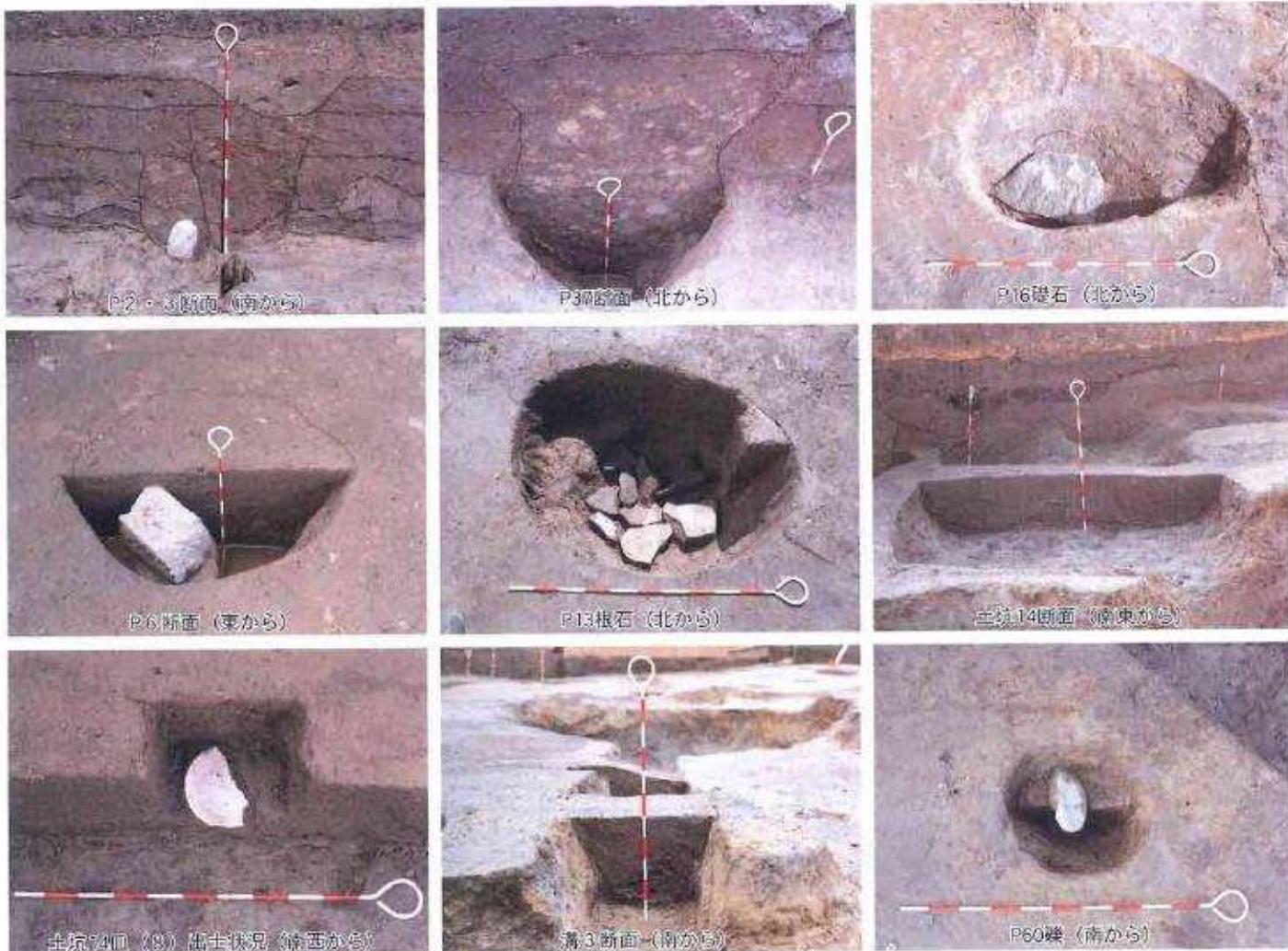


基本土層（西から）

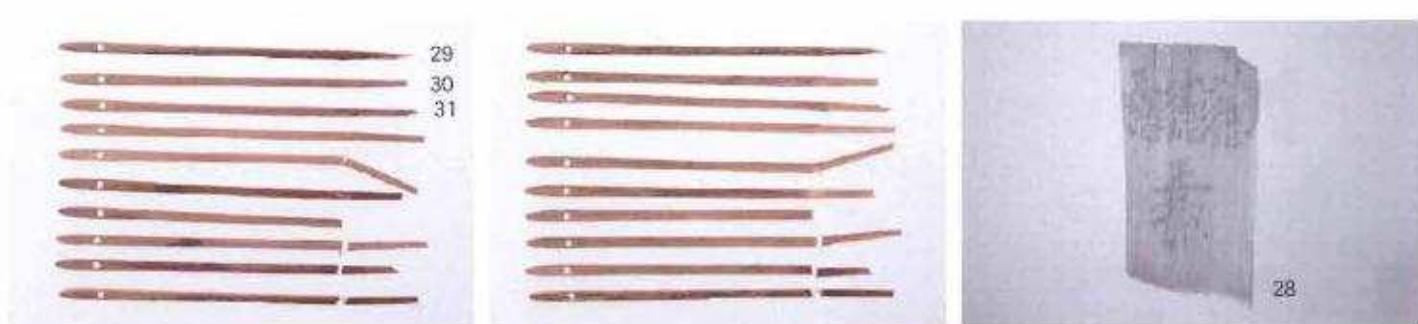
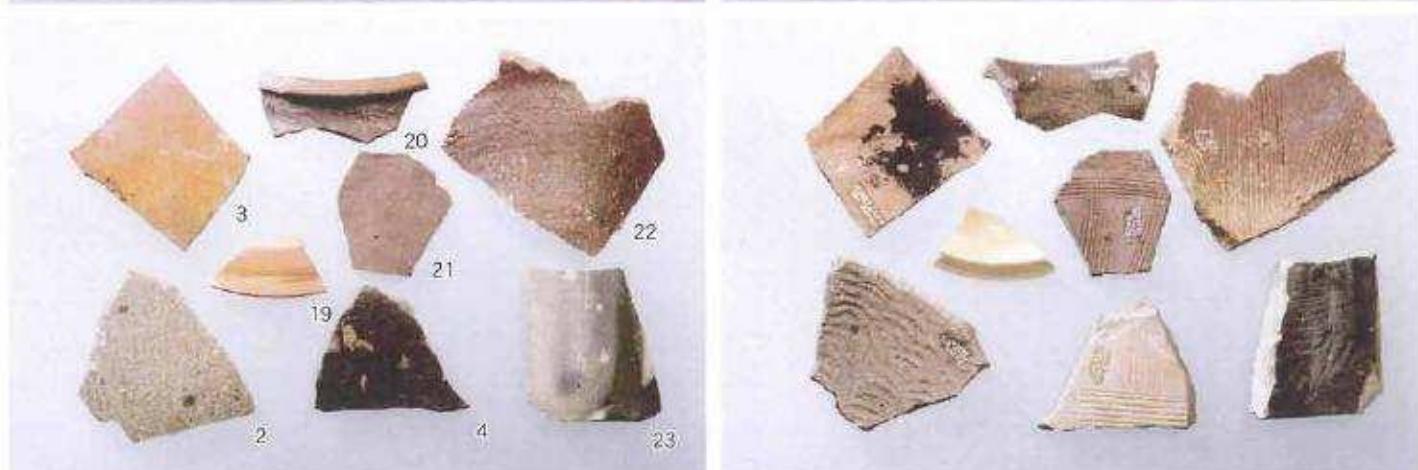
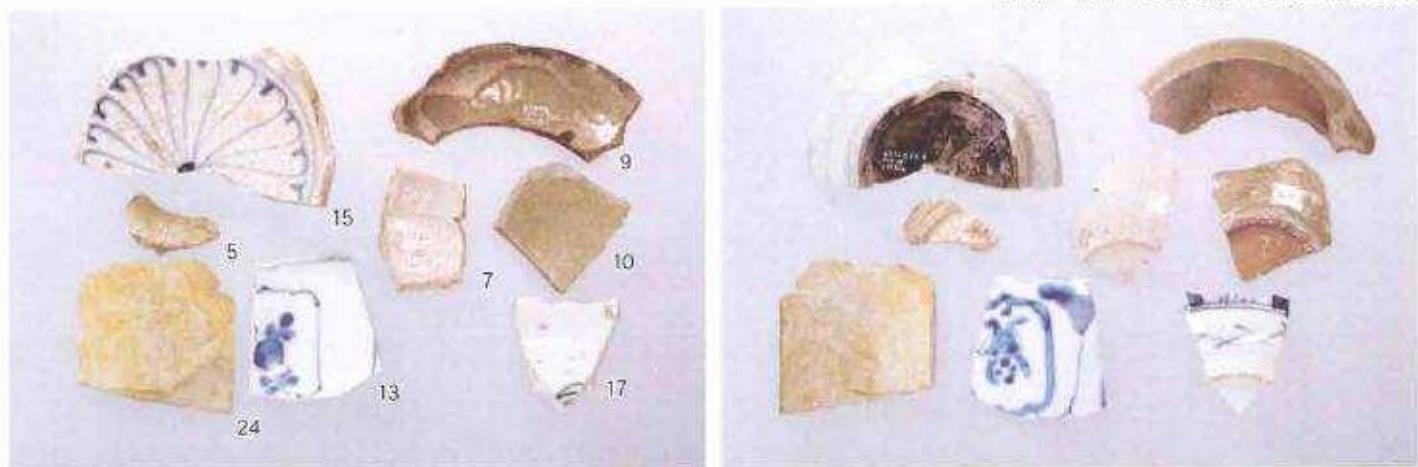
図版2 新発田城跡第24地点の調査 (2)



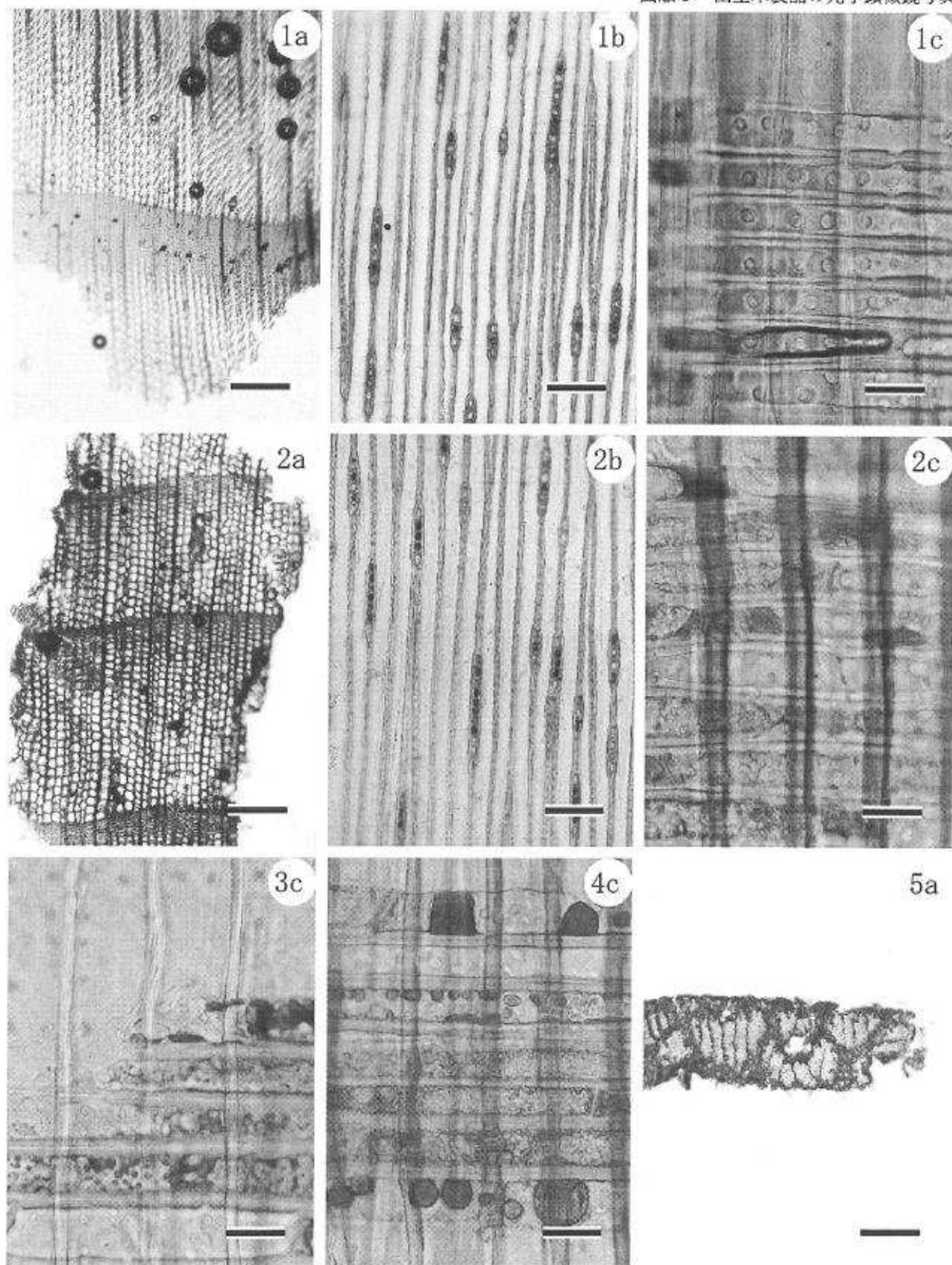
図版3 新発田城跡第24地点の調査 (3)



図版4 新発田城跡第24地点の調査 (4)



図版5 出土木製品の光学顕微鏡写真



1a-1c.スギ(No.7), 2a-2c.アスナロ(No.6), 3c.アスナロ(No.1), 4c.アスナロ(No.5), 5a.タケ亜科(No.4)
a:横断面(スケール=250 μm), b:接線断面(スケール=100 μm), c:放射断面(スケール=25 μm)

III　まとめ

1. 発掘調査の成果

今回の発掘調査で近世後期以降に比定される遺構確認面と、中世から近世初頭に比定される遺構確認面を検出し、上層を第1面、下層を第2面とした。第1面の主要な遺構出土遺物をみると、19世紀頃の遺物が主体を占めるものの、19世紀半ば以降に普及する瀬戸美濃磁器の湯呑碗が含まれないことを考慮すると、上限は19世紀の前半までさかのぼれそうである。一方、第2面で検出した遺構からは15世紀後半～17世紀初頭の陶磁器類が出土している。近世の記録や絵図面によると、調査地点付近は築城当初、屋敷地であったものが、寛政3(1791)年頃には御作事所となっていると考え合わせると、概ね第1面は御作事所期の遺構を含み、第2面の遺構は築城以前から築城当初の屋敷地だった頃の様相を示していると考えられる。

第1面検出の土坑7・8は、板材がまとまって出土しており、土坑7から出土した木簡が示す記年銘が18世紀前半頃を示すものの、出土陶磁器は19世紀代に比定される。板材を何かの素材と捉えるならば、木材の加工をおこなった御作事所との関連を想定できよう。また、井戸1は井戸側の掘り方から17世紀代の遺物が出土し、廃棄時に流入した埋土からは19世紀代の遺物が出土しているため、御作事所の時期を通して機能していたとみられる。

下層の第2面で検出した遺構のうち、方形の土坑14は16世紀末から17世紀初頭の陶磁器が出土しており、伴出した黒瓦片の評価が検討課題となるものの、近世新発田城築城期にあたる溝口I-1期(鶴巻ほか2001)に比定される。床面に柱穴とみられる浅いピットが二つ並び、中世の竪穴状土坑の系譜を引くとみられる。

掘立柱建物跡は、第1面・第2面で検出した。いずれも礎盤施設を持たない小規模なピットによって構成されており、隣接する第20-1地点で検出した掘立柱建物とも様相が異なっている。

<引用参考文献>

- 伊藤喜代子ほか 2008 『新発田城跡発掘調査報告書V(第19地点)』 新発田市教育委員会
小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』 農林水産技術会議事務所監修
九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』 九州近世陶磁学会 (佐賀県有田町)
新発田古地図等刊行会 1974 『一步一間歩詰物繪図』 (新発田市)
田中耕作 1987 『新発田城跡発掘調査報告書(I~III区)』 新発田市教育委員会
津田憲司ほか 2010 『新発田城跡発掘調査報告書VI(第22地点)』 新発田市教育委員会
鶴巻康志ほか 1997 『新発田城跡発掘調査報告書II(第7~10地点)』 新発田市教育委員会
鶴巻康志ほか 2001 『新発田城跡発掘調査報告書III(第11・12地点)』 新発田市教育委員会
新潟古代土器研究会編 2004 『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会 (新潟県三条市)
福井県教育委員会 1983 『県道舗江・美山線改良工事に伴なう発掘調査報告書』 福井県教育委員会
藤澤良祐 2004 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」 『衛瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』 第10輯 卫瀬戸市埋蔵文化財センター (愛知県瀬戸市)
宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」 『考古学が語る社会史 中・近世の北陸』 桂書房
森 賢 1995 「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通—大坂の資料を中心に—」 『ヒストリア』 第149号 大阪史学会
渡邊美穂子ほか 2009 『新発田城跡発掘調査報告書VI(第20地点)』 新発田市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	しばたじょうあと							
書名	新発田城跡発掘調査報告書 VII							
副書名	(第24地点)							
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財発掘調査報告 第46							
編著者名	鶴巻康志・小林克也							
発行	新発田市教育委員会					市町村コード	15206	
事務局	〒959-2323 新潟県新発田市乙次281番地2 新発田市教育委員会 教育部 生涯学習課 文化行政室 TEL0254-22-3715 (内線2234)							
報告書情報	A4判 横組1段 本文24頁 写真図版5頁							
遺跡名	所在地	遺跡No.	地形図 1/2.5万	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
新発田城跡 (第24地点)	新発田市 大手町 6丁目 4番16号ほか	92	新発田	37° 57' 20"	139° 19' 18"	2009 0907～ 1006 (18日間)	80m ²	陸上自衛隊新発田駐屯地建物建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
城郭	近世	土坑・溝・掘立柱建 物・井戸	古代須恵器、中世越前焼・ 近世陶磁器、屋根瓦・木簡・ 板材			中世～近世初頭と、近世後期～幕 末に比定される、2面の遺構確認 面を検出した。		
要 約								
調査地点は新発田城跡の二ノ丸西川門の外で、古記録によれば、近世前期は屋敷地、近世後期は御作事所として利 用されている。発掘調査によりそれぞれの時期とみられる遺構を検出した。上層の第1面で近世後期の井戸・土坑を検 出し、下層の第2面では中世の溝、近世初頭の土坑を検出した。第1面、第2面とも掘立柱建物の一部を検出したもの の、詳細な時期、規模は不明である。								

新発田城跡発掘調査報告書 VII

(第24地点)

発行 平成24(2012)年3月15日
 新発田市教育委員会
 新潟県新発田市乙次281番地2
 印刷 株式会社 エンジュ

本書は、本文・図版とも中性紙を使用しています。